



始





61

31-595



雪嶺 三宅

格

言

全

集

中央出版社發行

正  
7. 3. 25  
購







### 序言

□三宅雪嶺先生はその理想の高遠な點に於て、その主義の徹底せる點に於て、その人格の高潔な點に於て、實に當代一流の人物である。

□その文章雄健、筆力壯大、奇句警句、續出して讀者をして卷を掩ふ能はざらしむる所である、その述ぶる所は實に當代輕薄な社會を諷刺し、青年子弟を奮勵せしめ努力せしむる金玉の文字に當んでゐる。

□今その著述に係る「想痕」「宇宙」「世の中」及び諸誌に掲げられた先生の所説の中から、青年處世の教訓ともなるべき格言を抜き出して、是に註釋を加へたのは、一は先生の人格を偲び、一は即ち是に依て少しでも世道人心を裨益したいと云ふ編者の老婆心からである。

編者識



# 三宅雪嶺格言全集

世の進むに方り他に先んじて進むは、世の退くに際し他に後くれて退くと同じ。

—(想 真)—

世は必ず進歩すと限らず、たとへ大體に於て進歩して已まざるにせよ。其間一進一退管て絶ゆることなし、同様の變化を繰り返へせる支那の如きは、英雄豪傑の時代に先んじて顯はるゝ



あれば、又時代に後くれて顯はるゝあり、創業の臣は時代に先  
んせる者にして、誠節の士は時代に後れたる者、先んずると後  
るゝとに於て互に異なるも、進歩行動の以て世道人心に裨益あ  
りしは、相ひ軒輊すること能はず。

吾人時代を超出するの念ありてこそ、始めて時代に先んじ、  
若しくは時代に後くるゝを得るなれ、若し然らずして、唯徒ら  
に時代後くれと呼ばれんを畏れて、只管に之れを免かるゝに  
勉むるは、元と何程の人物にもあらず、皆凡俗界の一分子、  
塵世の一塵に過ぎず、世に爲すこと有らんとする者は、時代に

先後するを考ふるよりも、先づ時代を超出することを考ふべ  
し。

時代に應じて人物の相場定らば、時代の變ずるに従つて價  
値の變ずるも亦如何ともすべからず。

—(日本及日本人)—

眞價ある者は百世を通じて没するものではない、後必ず大に  
顯はれんと、顯はるゝ者固より之あり、然れどもその顯はるゝ  
者は焉ぞ亦次代の彈斥する所の者でないことを知らうや、而し  
て其彈斥せらるゝ者亦焉ぞ次代の勳蹟偉業を唱へざるを知ら



うや。

大忠臣の大姦臣と爲り、大姦臣の大忠臣と爲ると云ふことも  
間々あることである。故に好で異を唱ふ者があるけれども、亦  
唱ふべき道理が全然無いと云ふことは出来ない。

茲に足利尊氏の如きは安政文久の頃所謂草莽の有志等には、  
無上の逆賊であると云つて、塑像の首を刳がれたけども、評判  
一變して其人物を激賞するも亦鮮くはない、現に勝海舟の如き  
も其度量の測るべからざるに服するの一人であつた。また維新  
前後に於ける忠奸の辨も、今日に至つては甚だ信すべからざる

ものがある。彼の吉田松蔭の如きも赤盛名の其實に協はざるの  
観がある。

✓ 不得要領に應ずるに不得要領を以てするは即ち要領を得るな  
り。

—(世の中)—

人に要領を得させなくても差支へないと云ふのは、滑稽を用  
ふる場合である。誰でもさう絶えず鹿爪らしくして居れぬ。時  
に笑談も云ひ、揶揄もする。人が笑談を云つて來るに、眞面目  
に受けるには及ばぬ。笑談は笑談を以て應すべきである。揶揄



は擲揄を以て應すべきである。笑談と眞面目とを混ずると、譯の分らなくなる事がある。要領を得る者が、時として愚にせらるゝのは、其の邊の差別を能くせぬからである。要領を得させなくとも宜い場合のあるのは確かである。要領を得るが宜いか要領を得ざるが宜いか、要領を得てよい事もあり、要領を得ずしてよい事もある。その加減は略此處に云ひ來つたやうなものである。

徒らに頼むべからざるを頼まず、運命は我が努力如何にて決す。

—(想 疾)—

天稟に穎敏なるあり、天稟に遲鈍なるあり、穎敏なるは遲鈍なるに比し、勞せずして多く功を收むるも、穎敏なる者が中ごろ挫折し、遲鈍なる者が後ち漸く知能を發揮し、恰も兎と龜との競争の如く、孰れの智なるやを言ひ難きことあり、言ひ難ければ如何に運不運を定むべきや、幸運なるも、之に依頼して不運に陥り、不運なるも之を切り抜けて幸運となること、屢々世間に見る。

百年の苦樂汝自らに依れ。



—(世の中)—

死んだ或る有名な居士は、嘗て世間に持て囃された。吉原に在つて新聞の原稿を書き、金を湯水の如く使つた。晩年、或新聞社と約束し、月五百圓で毎日論説と、小説とを掲ぐる事にしたけれども、金が拂はれぬのに困却した。金の爲めに文を作れば、金を得ざるが爲めに心配せねばならぬ。さる心配は不愉快の次第である。さりとて金があれば金の心配ないが、それで愉快であるかと云へば、常にあれば愉快を感せぬ。恒産あるものは割合に愉快を感せぬ。が、恒産なきものは産なき爲めに心配

する、詰り無い者はあるやうになり、少いのが多くなる所に愉快がある。それも金があると云ふだけでは愉快が薄い。己れ一人の爲めにせず、幾人かの爲めにし、更に衆の爲めにするると云ふ所に、愉快が多くなる。絶へず衆の爲めにしやうとすれば際限が無い。其處で、常に新たなる愉快が感せられる。女子は百年の苦樂他に依ると云ふが、男子が百年の苦樂他に依ると云ふ調子では、如何にしても愈快なる生活と思はれぬ。若し一生安全であるならば偶然である。虎の威を借る狐が、虎と離れて、犬を怖がる有様は寧ろ、惘然である。虎の威を借つた時を思ひ



返せば、後の不愉快を感せず居られない。

鼠は到底猫に勝つ能はざるもの、而も其の窮して之を噬むに方りては實に侮るべからず。

——(日本及日本人)——

人に於て腕力とする所は國家に於て軍隊とする所、苟も一の國家として獨立する、即ち如何なる國に對しても屈すべからざるは當然の事、強國若し軍隊を以て來り迫れば、己れ亦た軍隊を以て之に抵るべく、小國といへども必ず能く自ら護らざるべからず。而して人に於て特に然りとす。國家は皆對等と稱する

も、其の大小強弱に於て著るしき差あり、最も大なるは最も小なるに百倍し、各自の勢力相ひ距る。亦た遠しと雖も、人々個々の間には、爾かく等差の甚だしきものある無し。固より老若男女の差あり、更に大小輕重人毎に異なるを視ても、假りに異なる者をして均しく睡眠中に在らしむる、則ち一挺の小刀、優に是等を殺害するに足るべく、一刺の下に絶命せんことは總べてを通じて同じ。以て本來大なる差違なきを推知すべし。是れ故に、形體に於て互に異なるが如く見ゆるも、其の小なる者に於て豫め心掛くる所ある。大なる者と角して、少しも輸する



無きを得、或は正面よりして相搏つこと能はずとも、猶ほ技術を以て之を制するを得べく、究竟之に應ずるの手加減をこそ要すれ、素と小なるの故を以て、他に屈するを要せざるなり。今や何事も皆な道理を以て辯すべく、個人の間、事に決せざる、乃ち公けの場に提出して此處に決するを得、復た腕力を用ゐて輸贏を決するの要なし。其の之を用ゐるは洵に野蠻の沙汰と謂ふべきが。國家相互にありて猶ほ軍隊を用ゐて事を決するの時代に於ては、其の一分子たる個人に在りても、亦た之を免れ能はざるは必然たり。而して他の強大にして我を壓するに足

り道理を主張するも直ちに腕力にて制せらるべきを言ひて空しく怨を呑みて黙するは、愉快の事たりとせず、小弱は強大と同じからざるも、小者弱者笑を必ずしも強者大者に壓倒せらるゝと限らん。即ち鼠は到底猫に勝つ能はざるもの、而も其の窮して之を噬むに方りては實に悔るべからず、幾ど對等と認むべき人々個々の間にありて、何ぞ他より暴力を加へられ、而して已れ之を防ぐ能はずと云ふの理あらんや、若し之れ有る、そは平素の心掛けの足らざるに坐す。

人は如何に老いて壯んなるとも、能力に限りあるを辨へざ



るべからず。

—(日本人)—

老耄して他の笑を招くは、一生の面目に關する無からず、さりとして早く隠居するも宜からず、相應の働きを爲し得る間は働くべし。但だ實力の何状なるやは急に決し難し、老人に於て自ら力ありと信じ、少壯者に於て其の力なきを認むれば、茲に衝突の生ずるを免れず、年寄りの冷水と云ふは餘り賞むべき事ならねど、少壯者が位置を高めんとして、老人攻撃に苦惱するも心すべき事なり、此等少壯者は後ち久しからずして他の爲に排

斥せらるべしと覺悟すべし。

大才は決斷するにあり。決斷は私利を去るより生ず。

—(世の中)—

大才小才の岐るゝは、智識智恵でない。事務の執れると執れないとかでない。先づ如何に決斷するかにある。決斷するとして盲滅法なるは云ふに足らんが、大抵利害に迷ひ、得を取るにしても、なるたけ損をせんようにと考へる。つらくと考へる間に、日が過ぎるのである。よく決斷するものは、或目的を達するため、或ものを損する事を厭はん。かくくの事をするに



は、かく／＼の損ありと見れば、損を諦めて了ふ。損を覺悟するかせんかの所に、決斷の効果が現はれる。其利害が一人一家に關係すれば、決斷は鈍るが、社會の爲め、國家のため、人類のためと云ふ様になれば、思ひ切りがよくなる。老西郷が、維新の變に於ける決斷と云ひ、廢藩置縣の際に於ける決斷と云ひ己れ一個よりも、大きい所から判斷するので、決斷し易かつた。澁澤男は利のない人と云はれ、時に多少の非難を招くが、如何なる相斷を持ちかけられても何等かの決斷を與へ、なるべく助けやうとするのは己れを以て社會に缺くべからざるものと認め

るやうになつて所もあらう。境遇に促かされて、次第に向上もしたであらうが、己れ一個よりも、大きな所に着眼するので、才能も多く現はれるのである。如何に才能に富み、行くとして可ならざるなしと云ふのであつても、自分の事はかり思つて居つては、大いに伸びる事はむづかしい。大才を以て智恵智識に優る事であるとすれば、或は間違ふ。大才と思はれるのは、才及び決斷及び精力にある。而して己れの事を思ふよりも更に廣く思ふに於ては愈々働きが現はれる。



大先輩と言ふ所のものは、自己の慾望を抛つのみならず、  
天下億萬の同胞に向て、偉大なる感化を及す者即ち是なり

——(斷雲流水)——

釋迦の如きものである。マホメットの如きである。耶蘇基督  
の如きである。之に次ぐ者は孔子の如く、親鸞の如く、道元の  
如く、日蓮の如きである。而して我道は正でなければならぬ。  
我理は順でなければならぬ。又我を信することは石の如く堅で  
なければならぬ。而して之を以て人道を輔け、人道を補はんと  
する、我欲何するものぞ、我利何する者ぞ、之を棄つることは

敵履の如きものである。

釋迦は其身萬乗の家に生れ、美酒嘉肴前に陳して其擇ぶに任  
せ、美人は詩して媚を献じ、人生の慾望と云ふ慾望は爲さうと  
して爲す能はないものはない。若し普通人であつて此地にあつ  
たならば、必ずや優遊逸樂、唯だ不死の藥を得ざるを以て一生  
の最大恨事とするであらう。彼が父皇其の遠世の志あるを思  
て、特に三人の美妃をして侍せしめたるに、之を顧みず、富貴  
觀樂を擲つこと、敵履を棄つるが如く、遂に單身雪山に入り、  
所謂仙人に就て道を學び、筥枝身を傷ふるも敢て顧みず、危険



死に瀕するも懼れず、天下の艱を経、天下の苦を嘗むること實に十二年、山を出づるの後、或は樹下に、或は石上に、法を説いて倦まず、遂に娑羅双林に瞑す、而して其亞細亞に及ばす所の感化勝て言詮を絶してゐると云つてよい。

人の世にある、獨り好惡の評幾度か變移して、或時は善人となり、或時は惡人となるのみならず、死後も亦然り。

(日本人)

人の人を評するは實に千種萬別、各是る所に因つて視る所を爭ふのである。無識なる者の識者を評するなどは固より其見る

所を過つて居るのである。故に——燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らん——とも云つてある。けれども所謂識者であつても、自ら己を見たと云ふ事だけは出来ないのである。即ち己れ自らが見て不可なしとしても、其實太だ可ならざるもの世に往々あるのである。

是非は必ずしも己れの見るところの不可に因りて之を判つべからず。

(斷雲流水)

人に對するの關係から見れば、自ら固く信じて之を爲さる



を疑はない時と雖も、識らざるの間に已に爲し了せるの觀あるやうなのは、自ら見る事の過てる者であつて、傳ふる所の風説其實を得たるものではないのである。然らば他評自評遂に爲し得べからざるか、譬へば茲に撮影器を執つて一家を寫す。寫眞なるものは實に其眞形を描寫したる疑はない。けれども丈尺の物を取つて之を尺寸の間に縮む、已に其大小を異にせるものではあるまいか、色澤は遂に認むべからざるにあらずや。而して家屋は間口を有するのみではない。奥行あり、裏面あり、區畫せる數多の室房がある。且つ其間には萬指數ふべからざる器物

がある、西より、東より、南より、北より、四方八面力を盡し術を盡しても遂に家なるものを寫撮して其全觀を示すことは出來ないのである。何ぞ其人を評すると太だ相似たるや。

修養の必要は却つて修養と云ふことを何とも思つて居ない人の方に多い。

——(道の會に於て)——

修養しやうとする人は、傳記を読み、説教を聴き、坐禪をしたりする時から、既に修養をしなければならぬと思つて居る人であつて、かういふ傾向を有してゐる人は、別に修養せずとも



餘り悪くはならぬ人である。その悪くならぬ人が修養するので一層善くなるのである。

貧にして富まんとする者は、貨道の天才を發揮し得るも、

他の天才を發揮し得ず。

——(想 痕)——

インガールがフムポルトを稱せる言に曰ふ、彼は富貴に生れしに拘らず、一の大人物と爲れり、金に拘らずといふ、何となれば富貴は天才の敵にして才能を破壊すればなり、人はいふ某は貧家に生まれて彼の如し、其の偉大なる所以なりと、而も

こは誤れり、世界の大人物の大多數は貧の胸に養はれたり、名譽の絶頂に上れるは最下級より昇れる者、即ち歐洲の茅屋、米洲、木舎、製造場の煙の裡に養成されし者、其の母は實に針仕事に忙しかりしなり、故にフムポルトの富貴より出でしは特に稱揚すべしと。言ふ所幾分の理なきに非ず、就職の途なきもの大に奮ふ所ありて可なり。

辭すきべ時に辭せざれば辭するに勝る損ある。

——(世の中)——

死すべき時に死せざれば、死に勝るの恥ありと云ふ事がある



がそれと同じ様に官吏して居つても辭すべき時に辭さなかつたならば大變な損がある。官を罷めさせられて實業に就かうとするのは、既に幾割か損したのである。

煩悶の靜思に於ける猶ほ狂奔の活動に於けるが如し。

(字 宙)

靜思は甚だ善い、活動も甚だ善い、而も煩悶と狂奔とは大に心せなければならぬ。煩悶する者は室内に閉居して物思ひに日を過ごし、活動する者から見れば如何にも意氣地なく考へられるであらう。狂奔する者は日夕屋外に營々し、靜思する者から

見れば如何にも無意義に考へられるであらう、而も煩悶も靜思として稱せらるべく、狂奔も活動として稱すべし、物は一概に判定すべからず、害よりせば則ち害あり、利よりせば則ち利あり。

室内に閑居して物思ひに耽れば兎角病的になり易い、小人閑居して不善を爲すとやら、小人の閑居するは頗る危険にして、小人でなくてもまた決して安全ではない、されど閑居することには必ずしも不可ではない、人は靜思して自覺し、己れの過を悟り、又た人生に妙趣ある覺ゆ、而も單に靜思するのみでは足ら



ない、静思に偏すれば往々徒らに惑ひて的着する所を知らぬであらう、此等の人は強て外に出でて活動せしめなければならぬ。

屋外に奔走する者は百方身の利を計り、他を排擠して自らの地位を高め、他を陥れて其の財を攫まんとし、弱肉強食を實行して得々たるが、人の生存する所以、社會の成立する所以は實に人の活動して已まざる所に在つて、奮闘は眞に缺くべからずと爲すものである、若し奮闘なければ進歩發達なく、社會は停滞し、人口は減少せん、而も唯だ此の如くんば、人生は餘り

に殺風景である。人口のみ増殖したりとて何の益ありとすべき斯く狂奔する者は静思して自ら省み、生を考へ、死を考へ、生活に興味あらしむべし。而して静思は煩悶となさざるやうにせよ、活動は狂奔とならざるやうにせよ、静思を静思たらしめ、活動を活動たらしむるは、静思活動を適當に交代せしむるに在り。

人の死を悲しむは、實に其の天壽を全くせざる所に存す。

——(日本及日本人)——

即ち死そのものを悲しむよりも、其人の天壽を全くせざるを



悲しみ、其の人の尙ほ爲すべきありて終に之を爲すこと能はず若しくは其人の逝くが爲め、此に關係ある人々の寔寂を感じるよりして之を悲しむこと多し。而して是れ人情の當さに然るべき所なり。年少しく老ゆれば身體衰弱し、偶々病に冒されて斃る。我國にて死者の平均年數四十歳以下にして、比較的最も長命なる國人とても五十を出づる僅に、乃ち我が知る所の多くは人生猶ほ爲すあるべきの齡を以て死する者、其の優に事業を爲すべく、又た親戚朋友と與に俱にすべくして然る能はざるの故に、自他悲哀の情を懐くこと一層切なり。

人の性格は自づと親に表はれるもので、智仁勇が備はつて居ると何處となしに圓滿に見える。

—(哲學雜誌)—

時によると随分異様な顔容であつても、其の中から智仁勇が閃いて、尊く覺えさせるものがある。ソクラテースは極めて醜男であつた。アーチピテスは、怪物のソクラテースに著つきつけられたが不思議であると云つた。普通の人は怪物ほどでなければ性格さへ備はつて居れば、立派に見ゆるものである。一見しては何と云ふ感じもなく、くだらぬやうに感じて、始終逢



へば氣高く感ずる様になる。

生活難なければ、勤勞の爲に勤勞すべきも、生活難の壓迫し來りては、之を免れんが爲に勤勞し、寧ろ全力を以て之に當たること多し。

—(想 痕)—

之を免れんとする餘り、初め必要なる金額を求めたりし者、後に必要な金を求め、唯だ金を得るが爲に勤勞するに至る、恐慌が人をして恐れしめ、恐るべからざるをも恐れしむると同様、生活難の恐れは、總ての標準を金に歸せざれば已まず、

地獄の沙汰も金次第とあるが、娑婆に生活するにも金次第にして、金なければ到底世に立つこと能はずと考ふ、人皆な營業なかるべからずとして、營業と異なる職業を營業視し、事業をも營業視し、營業を措いて他に何事も無しとす。水に對する恐水病の如く、生活難を恐るゝこと度に過ぐ。

✓ 總て元氣あるものは勝者たり得べし。自ら本來の能力を發揮せざるものは元氣哀ふ。

—(世の中)—

太刀山が元氣盛んであると云ふのも、彼が如何なる敵にも勝



ちさうな勢があるからである。彼は素と固くなる方で、顔は蒼くなつて、さうして負けるのが常であつた。處が、今はそうでない。自分は決して負けぬと信じて居るらしい。それで宜い兎角相撲は勝ち出すと全勝を得る事が珍らしくない。これ勝を得ると信じて強くなるからである。弱い女が火事の折に、重い荷物を取り出すのも一に精神の力である。日露の戦役で、對戦十日餘り續いた事があつた。平生では疲れて斃るゝ所であるが我軍は精神力を緊張させて居た爲に、終に根氣較べて勝つた。腕力を要せぬ事業に至つては、尙更根氣元氣が必要である。

けれども自分本來の能力を發揮しない人はこの元氣が衰へてしまふのである。

人は本來社交的の者たり。近きは親戚朋友より遠きは未だ見ざる人々まで、互に會ひ交りて以て生を作すべきも、常に列肆繁華の中に在りて其の刺戟を被るのみなる、竟に自我を失するを免れず。

—(日本人)—

時に獨りにして聞處し、翻然として自我に復し、己れのを悟ることあり。されど均しく單獨と爲るにも、亦た自ら類を異



にする無からず、世間の煩累に堪へずして、避けて閑地に静處  
 する如き、單に其の故を以て何の稱すべきなし。強て山林に隱  
 栖し、故さらに人間と異なるの所事を爲す、斯の如きは徧僻な  
 る自己の一心に任せて行止するもの、元と人生を誤認せるに坐  
 す。世を捨つるに非ずして、世に捨てられたるの狀なきにしも  
 あらず。特に世を俗として嘲けり刺り、已れ則ち俗外に超脱せ  
 る如くに装ひて、風流韻事を専らとする者に至りては、往々に  
 して俗の俗なると看ることあり。

普通人は眼眸の及ぶ所自ら普通の限界に止まり、復た之を

超ゆこと少し。

——(日本及日本人)——

稍々群を出づる者は稍々之を超え、大に群を出づる者は大に  
 之を超え、別に尋常の外に於て逍遙する無きを得ず、人類の社  
 會たる其の範圍甚だ狭少、試みに地圖を展覧する、人の棲息す  
 る地は真に其の極小部分のみ。而して一たび眼を此れ以外に放  
 つ、則ち山川の美は到る處に存し、天地自然の樂み髣髴として  
 心に感せられん。普通人は普人の事に忙殺され、復た之を觀る  
 こと能はざるも、偶し已む無きの事情に會ひ、已れ一人の外他



に人類を見ざるの境遇に接する、乃ち天地自然を伴侶として不可思議の情思を浮ぶに至る。

✓ 子が親と同じ事をなし、一步も進むところなければ、その子は生れざると變りなし。

—(世の中)—

親は其親の働いた後を引繼いで働き、子は同じく親の働いた後を引繼いで働くべきである。世間全體に、何事かに於て親の成し遂げたところに、加へるところがなくてはならぬ。

職業及事業に於て親に劣り幾代も先きの先祖に劣るやうでは

生れぬに若くはないのである。何事かで親に勝れば、子として生れただけの事はある。

九尺二間に住んで居つても、親の代よりも茶碗一つでも殖やせば、是れだけ生れた効能はある。

華族で、祖先の財産を讀り受け、之を増さぬは、減らすよりもよいのである。減らさなくても其儘に持つて居るだけでは生れたとて生れぬと違はぬ。大名の多くは三百年間同じ事を繰返して來て居るのであつて、子孫は働きの度に於て劣つて居るだけ、生れた効能の分らぬ方である。併し、生れなんだならば、



家絶と云ふ事になるのであつて、家を維持するの點に於て、  
 低能兒でも、生れ甲斐があつたとすべきである。長者の子孫も  
 先づさう云ふ調子である。低能兒でも、番頭がしつかりして居  
 れば、利息ばかりでも、財産が増す、生れたゞけの事はあつた  
 とすべきである。併し、家を維持し、若くは何程か財産が増す  
 と云ふだけでは、生れた甲斐あつても其の甲斐がない。事は其  
 家に限られて居つて、世間の進歩に益するの範圍が甚だ狭い。  
 狭いのも動もすれば、コンマ以外に取扱はれる。家を維持する  
 とか、家産を増すとかよりも、自ら新たに事業を起したならば

一層進歩に貢献するところがある。

人は癖に従ふを快しとし、益々之を助長し、遂に改むる能  
 はざるに至るが、早きに於て矯むれば、必ず幾許かの効果  
 を見る。

—(想 痕)—

動癖の陥る弊や燥暴、静癖の陥る弊や柔懦、孰れも事に益な  
 きが其の長所よりせば、各々稱すべきあり。活動は生命の具體  
 的に現はるゝもの、静思は生命をして意義あらしむるもの、活  
 動に専らなる者をして少しく静思せしめ、静思に専らなる者を



して少しく活動せしむるは、其の陥るべき弊より免れしむる所  
あらん。性癖に背くは當人の厭ふ所なれども、務めて中庸を得  
せしむるの望まし。

過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し。活動する者と、静思する者  
と、本来性癖を異にし、相ひ同くせしむるを得ざるも、何程か  
短所を補ふは、多くの場合に於て長所を發揮するに益あり。餘  
りに活動に偏し、餘りに静思に偏するは、極少の例外を除き、  
事の宜しきを得ず、精神上の應病與樂は僅々二三に限らざるが  
活動する者に静思の藥を與へ、静思する者に活動の藥を與ふる

こと頗る重要なり。

▽ 依頼は人の運命を弄ぶものなり。

—(世の中)—

何か世の中に一機軸を出し新たな事業を起すのは、概ね獨立  
心の依頼心に勝つた方である。交り合ひ持ち合ひだけに、人に  
依頼するにしても、依頼して己れの目的を變ずるやうな事をせ  
ぬ。己れの目的を變せねばならぬ程ならば依頼せぬ。他人にも  
依頼せぬ。己一人が無事遣り通して見せると云ふ覺悟あるもの  
は、意のある處道ありとの諺に洩れず、必らず何等かの運命が



開かれる。昔から歴史に何等か見るべき痕跡を留めたものは概ね已れ自らの力を信じ、已の力で成し遂げるの決心あつたとすべきである。自恃の人である。

セルフ、レタイアンスの人である。依頼心ある者は碌々として人に頼つて事をなすだけである。併し、已れ一人でも成し遂げると云ふ決心は、其の全力を發揮させる所以のものであるが一人だけで渡つて行かれる世の中ではない。ナポレオンは軍人として神の如き者である。ウエリントンも名將であるが、ツールローの戦争の勝負容易に決せぬ。ナポレオンはグルシーの

來るのを待つた。ウエリントンはブルヘルの來るのを待つた。俄に砲聲が大に起つた。ナポレオンはグルシーの到着したのと思つた。豈に圖らんブルヘルである。而して大敗に終つた。若し當時グルシーが到着したならばナポレオンは大なる勝利者であつた。ナポレオンはグルシーに依頼して敗け、ウエリントンはブルヘルに依頼して勝つた。併し、ナポレオン自ら言つた。ツールローに於ける戦略は我が傑作であつたと。後世兵學者亦之を認める。敗けても戦闘に於て比類なしとせられる。其の固有の能力の争ふべからざるものがある事はつまりこの人にあ



る。

悪友の畏るべきは虎よりも甚だし。人皆な之を知るも、悪友の爲めに害を被むらざる間、之を感じるの薄きを免れず

——(日本及日本人)——

酒勾常明氏は自殺する前夜、子女を集めて曰へりき、悪友と交る勿れ、父は悪友と交りて一生を誤れり、汝等決して悪友と交る勿れと。烏の將に死せんとする、其の鳴くや悲し。人の將に死せんとする、其の言ふや善し。たとへ必ずしも善からざるも、氏の言へりしが如き、確かに善しとすべし。西諺に曰ふ、

悪友は公敵よりも害ありと。又た曰ふ、友を擇べよ、否らすんば良友をも失はんと。小學讀本にも、或は草に喩へ、或は犬に譬へ、悪友の爲に損する事例を擧ぐるに怠らず、少年は最も周圍の影響を被り易く、悪友を得ると、良友を得ると、將來の運命に關する少からず。青年男女の墮落の頻りに傳へらるゝが、性來悪傾向の者なきに非ざるも、多くは悪友と交れるに基づき若し悪友と交らざれば、思はしき發達なきも、身を誤るに至らざらんと考へらる。當初學校に於て級の上席を占め、深く希望を囑せられながら、後ち放蕩に身を持ち崩し、詐欺取罪脅喝取



罪を取てするあるは、事情の種々なる中、悪友と交れるを以て主なる者と爲す。感化院に預けらるゝは、概ね悪友に誘はれたるもの、悪友の畏るべきは虎よりも甚だしと云ふべし。酒匂氏は自ら悪友の爲めに害を被り、前途多望の身を殺すの已むを得ざるに及びし丈、之を感ずるの最も痛切なりしならん。過去を顧みて煩悶懊惱する毎に、悪友と交りしを悔恨したるべし。其の子女を戒むるに悪友の事を以てせしは、徒らに聖賢の名言を繰り返すの類にあらず、全く實地を踐みし結果にして、傳へ聞ける者皆首肯せざるなし。氏の家にては、悪友と交る勿れ

との一言、千萬言の演説より效能あり。されど悪友と交る勿れとは、少年への好訓語なると同様、青壯年にも好訓語なるかと言へば、多少の疑なきに非ず。少年の頃は事甚だ單純なれど、漸く長じて漸く複雑を加へ、行動の範圍の擴まるに伴ひ、益々複雑を加ふるの避くべくもなし。若し友を擇ぶに専らにして、苟も良友と認むべからざる、悉く悪友として交らざれば、自から天地を狭くするは差支なし、悪友ならざるを悪友とするの失するを奈何せん。良友悪友は判然たる差別あるに非ず、交らすして之を選択し得べきやは疑はし。小學中學にては、友なき



S. Maruyama

も可、友あるも可、唯だ悪友を避けさへせば持に夫ふ所なから  
んも、高等學校若くは専門學校に於て、尙ほ爾かく小心翼翼た  
らんか、習ひ性と爲り、獨り自力を守り、他に何の爲すあるを  
得ざるに至らん。世間の人は、若干の最も優れると、若干の最  
も劣れるとを除き、大抵一得一失、平均點に於て僅かの等差あ  
るに過ぎず。優劣の明白なる者も、常に然るを保證し難たし。  
初め優りて後に劣るあり、初め劣りて後ち優るあり、或は學業  
の優りて品性の劣り、或は品性の優りて學業の劣るあり、學業  
の爲めにせんとして品性の劣れるを顧みざると、品性の爲めに

せんとして學業の劣るを顧みざると、孰れが宜しきやを決すべ  
からず。學校にては、學業優等品行方正といふの重んぜらるゝ  
が、品行方正は品行不方正に優るも、以て道德の總てなりと爲  
すを得ず。品行方正にして、而も職員に阿り學友を陥るゝあり  
品行不方正にして而も正義の爲に邁往し、人の急に趣き水火を  
も避けざるあり。長處よりせば長處の認むべく、短處よりせば  
短處の認むべし。如何なるを良友とし、如何なるを悪友とする  
か、瑣細の點に拘泥して選擇するは、或は選擇せざるより弊の  
多からん。孔子は益者三友、損者三友、友レ諒、友ニ多聞、益矣、



友便二僻、友三善柔、友二便佞、損矣といへり。是れ或る程度まで益友損友の別る々所なれど、直も諒も多聞も單純ならず。便僻も善柔も便佞も單純ならず。直の如くして直ならず、諒の如くして諒ならず、便僻の如くして便僻ならず、善柔の如くして善柔ならず、一見して性格を辨識し得るなきに非ざれど、容易に辨識し得ざるも少からず。孔子は、吾れ言を以て人を取る、之を宰予に失す、貌を以て人を取る之を子羽に失すといへり。輕々しく人を選択すべからざる、以て察すべし。世に善人悪人あるに相違なきも、偽善偽悪あり、善と偽善、悪と偽悪、

之を區分し易からず。悪友と交らざらんと欲するも、悪の或は偽悪ならざるを必ずべからず。偽悪は偽善より多からざれど、著るしき偽悪こそ少けれ、部分的偽悪は屢々見る所にして、失の磊々落落を以て居るは概ね然り。繩墨を以て律すれば、批難すべきの多きも、批難すべき間、一分愛すべく敬ふべき垂々とせず。逆境は友を量るべき唯一の秤なりとは、ブルタルクの言なり。逆境に在る時、敢て手を伸ばし救ひ來るは、偽善者ならずして却て偽悪者なるの例に乏しからず。酒勾氏が目して己れの悪友と偽しつゝ、何人なるかの明白ならざれど、其の悪友とは



嘗て良友と見做し、者、剩へ無二の良友と信せし者ならずや。偽善を善とし、偽悪を悪とし、眞善悪を看取し得ざりては、やがて、不測の禍を招くに至りし所以ならずや。氏の如き境遇にては、悪友と交らざらんこと到底得て能くすべからず。唯だ其間如何に身を處すべきか、問題たりしなり。

人若し有機體の偶然性に拘泥し、之を有機體の必然性なる如くに心得、生物は斯くの如くならざるべからずと解する如きことあらば、甚しい謬見なり。

動物の飲食と脱糞とは、動物に必須の必然性でなく偶然性である。

現在の人の眼に見える方法と時とに於て、營養を吸収し、老廢物を排泄する動物が何處かに無いとも限らない。なるほど、有機體即ち生物の體には多少とも新陳代謝があつて或細胞が死に、新たな細胞が之に代るに相違ない。然し、この新陳代謝は動物の飲食、脱糞に顯はれるやうな形式の吸収、排泄によつて必ず人目に觸るゝものと思へば大なる謬見で、冬季中、穴に冬籠をする蛇は、一見死んだ様に見へる。隨て其の體内に行はれ



る新陳代謝も頗る緩慢で、人は容易に之を認め得ぬほどである。數百年を経過した草木の種子で、其の體の新陳代謝が全く人目に觸れないものでも、之を播けば芽を萌すのがある。この種子の體には數百年間に多少新陳代謝があつたに相違ないけれども人間の眼から視れば、無いと謂つても可いものである。それでも其の萌芽したのに徴すれば、死んだのではなくて、確に生命があつたのである。故に、體に新陳代謝の行はれてるのが見えぬからとて、直に其の物を目して生物でない、とは謂へぬ筈だ。

地球は、毀滅たる銀河の裡にある一つの小さな塵に等しきものなり。

—(宇 宙)—

宇宙を一つの纏つたものと考へ、その間に整然たる秩序のあるものと思ふ事は、昔でも今でも變りはないが、昔の人の宇宙は今の人の宇宙よりも遙に小さなもので、昔の人は宇宙の秩序を、今の人の様に複雑なものとして考へては居らなかつたのである。然るに、時代の経過すると一所に、地球が宇宙の中心でない事が明にされたり、又、人の眼に大きく見える月は、小さく見え



る星よりも、實際に於て却て小さなもので、月は地球を運り、地球は太陽を運り、太陽は更に又他の太陽を運り、地球は一つの小さな塵に等しいものであることが言ひ得るのである。

金の金力となるは人の力なり。

—(世の中)—

金力の大きな事は一般に考へられて居る通りであつて、金の多寡によつて、事の成否の分るゝことは、珍しくないが、金力と云ふも、畢竟するに、入力である。金のみ幾千萬積み重ねたとして、力ありと云はれん。鑛山の中に金が埋もれて居り、是れ

を掘り出し、是れを貨幣にして世間に通用するのも皆入力である。

奮闘力の消長は年齢と關係なし。

—(世の中)—

青年中年を通じて、孔子の所謂「闘」と云ふことがなければならぬ。闘とは即ち奮闘の義である。人間には之がなくては駄目だ。然るに老人になると、一般に奮闘と云ふ氣が無くなるものである。尤も年の若い人でも、奮闘力のない人がある。又年を取つても十分奮闘力のある人があり。年の行ぬ人が青年で——



若い人で、随つて活動力があり、歳に行つた人が老人で、随つて役に立ぬと云ふ事は出来ないとの断りがある。

美と云へば優しい弱々しいものを指すやうて餘り堂々とした強いものを入れると美麗の邪魔になるらしい。

——(帝國教育會に於て)——

一般美と云へば婦人の美といふことになつて居て男の美と云ふ場合にも婦人の美に準じて云つて居る傾きがある。

乍併男の美を云ふ時にも言葉の上にくそ表はさわれ、心の中では實に宏壯と解して居ることがあるに違ひない。宏壯と云

はずして實際宏壯の扱をして居るに違ひないが、普通美と云へば婦人の美に準ずるのであつて、男性美も婦人に似たのを美といふのである。男性で婦人に似たやうな美の最も著しく發揮さるゝのは未だ十分に身體の發達しない十六七歳頃の中性といふべき時代である。昔は希臘邊でも少年美を中性美として愛で居た。それより年が長じて本當の男となつてからも、普通の美といふものは、婦人の美から推して言つたものである。

眞面目を看板にして人を欺くは卑むべきなり。

——(世の中)——



日本の官吏は近來益々人の眞面目でなければならぬ事を云ふ容態も何處となく眞面目である。所で、官吏の言ふ事は當にならぬと言ふ調子では、眞に眞面であるか、人を入の道を開いた。コンミンションを取るの道を開いた。人に實を打ち明けず不得要領を以てするの道を開いた。官吏はことごとく爾うであると言ふのではなく、中には眞底眞面目なものもあるけれども、一般の氣風は、外を眞面目にし、内を不眞面目にする傾ありはせぬか。實業界にも之を眞似る様な事がありは

せぬか。歐米人は動もすれば日本人の不信實なるを口にする。外を眞面目にするのはグレースにする事である。或はシーリアスにする事である。鹿爪らしく、眞面目にするのは其邊であるが、シンセリターの意味なる眞面目は充分に解せられて居らぬ又英雄はシンセリターがなくてはならぬ。誠實がなくてはならぬ。眞摯でなくてはならぬ。と言ふ様な意味合の眞面目は眞面目の最も美しいのである。處が、今日は、英雄人を欺くと云ふ様な事を好む風がある。戯れるならばいくらでもよい。大に戯る可きであるが、決して欺く可きでない。然るに、滅多に戯れず



謹嚴の風をして人を欺くのは卑む可きである。山縣公は眞面目と言ふ評判であるが眞面目でないと見られた伊藤公と伊れが眞面目であるかは疑問である。眞面目なる人物としての標本はいつもリンゴンの如きが挙げられる。眞面目くさらず、鹿爪らしくせず、而して眞面目である。何處までも眞面目である。西郷南洲も眞面目くさらずに眞面目であつた。高杉東行は表面では眞面目でない。時としては甚だ眞面目でなかつたが、内心は甚だ眞面目であつた。

人道の爲に偉業を成就し、以て至貴至高なる遺蹟を後昆に

垂るゝ者、皆我を信じて我を棄つるの要素あるを以てのみ

——(實業の世界)——

獨り曠世の大改造家のみではない、之に下るの改造家と雖も悉く皆此の要素が幾分を保有しないものはなく、之を保有せる分量の多少に随つて其の感化の厚薄、其事業の大小、其の遺蹟の宏狹を測知するを得るのである。

汝の虚偽を去れ、汝の倨傲を棄て、汝の奢侈を慎め、汝の贅澤を斥け、汝の妾宅を毀て、言行一致、實踐躬行、以て眞成に斯民を愛し斯民を思ふの眞面目を一世に衣出せざる



べからず。

——(青年訓)——

史家曰く、ルーテルの宗教改革を唱ふるや、羅馬法皇の宮殿は屋頂より床下に至るまで慄動せり、柱より釘に至るまで慄動せり、何となれば富貴奢侈を盡すを得べき人(即ちルーテル)が跣足單衣、謙遜なる音聲を以て法皇に反対したればなりと——

孰れの世、何れの時を曰はず、社會は常に波動の如くに——

起一伏するものなり。

——(世の中)——

非常に運動すれば、非常に休息せんことを欲し、甚だ口腹の充滿したる時は、一舉手一投足の勞、猶ほ且つ之を爲すを厭ふものである。

蓋し明治維新開國以來、社會伸暢の進度益々激しく、猶ほ今日以後止むるを知らざるべし。想ふに疑を此の遷移に容れて狼狽するは、即ち弱者、劣者、凡者、泰然として此時代を経過する者こそ眞の強者、優者、王者と云ふのである。古人曰く——

艱難人を王成す——と漠然たる諫言であるけれども、沈思默考すれば正に今日の時代に適中するを知るであらう。



浮雲は決して長へに明月を蔽ふものではない。今日の青年は只だ應に力を極めて這般の消極的社會と奮戦格闘し、遂に以て之を打破せなければならぬ。而して同時に社會生活の戦争の長いことを知らねばならぬ。

小人なる者は、外徳義を装ふ所ありて、而して實則ち副はざる者の謂なり。

——(世の中)——

官に仕へて勤勉、其の職を愆らさず、晨には期に先に出て、晩には期に後れて退き、歸れば則ち上司の門に伺候して爲に其の

勞に服する者、其公務に於ける、即ち勉めすと云ふべからず、而も其の心は實に一級二級の昇進を希ひ、寧ろ窃に其の同僚を陥れるとも、上意を迎合して榮進を取らんと欲する者、此等の徒をして意を得て恣睢せしむるや、則ち所謂群小の跋扈を致し善類爲に蕩せんとす、諸省の長官、一たび地位を揺かす毎に簇起して鄙劣の舉措に汲々たる者皆此の徒とす。

銀行に頭取として、力を實業の振興に効すが如き者あり、彼實に他人を禍に擠して、己れ獨り利を獲、事業の盛昌、一時の觀を索きて、利源私營に涸れ、因て經濟の恐慌を來して、人皆



燒に懲りて手を斂むるも、己れは猶ほ實業家の名を冒して、私財の豊富なるを得、是亦小人と謂はざるべからず。

悪人の憎むべきは論ずるまでもない。而も其の悪や明々白々以て刑誅すべく、以て指斥すべきである。獨り小人の慝を作すや、其の始め顯はれず、顯はれざるが故に、人輒ち欺かれて或は以て有徳となし、悪人と比數しない、故に其の毒を流すは更に甚しいのである。

妻の家財に富むを以て、己れも亦俄にして富有を致す。是亦名を普通の事に藉りて窃に利を貪る者と謂ふべからざら

んや。

—(字 宙)—

若し妻を養ふの力があつて而して婚を成さば則ち洵に可なり則ち其の生計固より當さに自ら爲すこと従前に異なる所がないであらう。今婚を成すの故を以て、忽然として資財豊屋を受く、受くること何の爲にするか、必ず受けざるべからずば、己に其の生計に足らざるに非ず、受くる所の餘饒、之を公益に供して而して已れば則ち其の生を營むこと、従然の如くする、庶幾くは可ならんか、豊屋美服、俄にして富有を致す、其の何の縁る



所なるかを思はゞ、愧赦せざるを得る者幾ばくぞ、而して以て耻と爲さるる者あらんか、是れ其の心を敗絮にするや久し、亦小人の徒と謂ふべし。

負債の忌むべきは論を待たず、人の財を借りて、輒すく還すこと能はず、義に於て完からざる所ある也。

——(世の中)——

但だかの負債なきを以て人に累を及ぼさるるを以て、其の知友の窘進を坐視して顧みず、亦已に甚し、若し其の力以て債を起すに足らざれば則ち已む力能く債を起すに足り、又明かに異

時清遠の期望あり、而して猶ほ且つ冷々然として知友の急難に迫らるゝを傍觀して、唯だ其の債を負ひ、無用の義務を益さるるを名とす、其の人と爲りや果して如何と云ふ、身を殺して仁を成すと云はずや、彼れも亦此の語を以て理に背けりと爲さず、時には則ち事に當りて難に臨む、身を擲つを憚らずと廣言す、夫れ身を擲つすら既に憚らざれば、則ち少しく名聞に累ある、何ぞ避くる所にあらんや。

世俗の稱して碩儒と爲す者あり、書を著して道德し論説し又勅語の義を解釋し、發售頻繁なり。



—(世の中)—

若し其の徒の内行を以て、之を其の云ふ所に律せば、差何ぞ  
 天淵のみならん、其をして心あらしめば、當さに勅語に對して  
 慚愧せざるべからざる者皆是なり、願ふに勅語を以て準と爲し  
 因て以て立つる所の倫理を牢守して、違行なからんことを欲す  
 るは、それ亦至難なり、尋常人の能くすべき所に非ず、故に言  
 ふ者の必らずしも行ふ能はざるは、何ぞ深く咎むべけんや。但  
 だ己に其の至難を知りて、仰で而して之れを奉ずるに之れ暇あ  
 らざらんとす、如何ぞ倫理の書を售りて、營利を圖るに至るべ

けんや、博士といひ、教授といひ、教頭といひ、世の共に崇尙  
 する令名に藉りて、名を註釋に託し、連りに利を獲んことを圖  
 る、已甚しからずや。果して世の爲にし人の爲にせんと欲し  
 書を著はすの必ず已むべからずば、書賈刷行の費用は姑く舍く  
 已れの贏得する所は、全く之を放棄して、其の價を廉にし、以  
 て公衆の購覽に便せざるべからず、其の利を已れに願つあらば  
 又其の囊を豊にすることを舍めて、之を公共に益するの途に  
 投ず、猶は可なりと爲すなり。

堂々たる博士教授の名に倚り、稱して碩德鴻才と爲され、營



々として著書發售の競争に勉むる者、其の何の意なるを解せざるなり。

腕を叩いて猥りに時を得ざるを啣ち天斯の大豪傑を棄つと  
嗟嘆するは即ち己の境遇に耐ふる能はざる者なり。

—(青年訓)—

世には固より遇と不遇とがある、見るべきの才能なくして大に顯名聞達なる者もあれば、又固より利器を人に知られずして空谷に飢ふる者もある。時を得なければそれまでのことである世を怨み人を怨むも何かあらんや、若し又進んで爲すあるの機

會を作り得べくば、徐々として其途に前進すべし、世を怨み人を怨むは固より要なきことである。自ら嗟嘆するは己れの境遇に耐ふる能はざるものである。彼れ耐ふるの強志力行あらば、何ぞ乃ち平然として安せしめて、颯々として口頭眉端を動かすや、況んや大豪傑たるの資格を有するや否やは、甚だ怪しき代物でありながら、豪傑々々不遇々々と喧しく連呼する者は、是れ實に事に耐ふる能はずして、一種の精神病に罹れる病癡子のみ。

自ら人間の勢力を信ずるに至らば、尙人間の力に餘りある



を見出すべし。

—(宇 宙)—

人間の働力は左迄些少のものではない、若し多忙であるとして働力を限局するは、實に人間の勢力を輕侮する罪人とも云ふべきである。從來人は稱して萬物の靈長と云ふ、之を鑛物に比せば乃ち黄金である。今金塊を執つて打てば、勿ち扁平となる尙打てば益扁平となる、而して遂には片々たる箔と化するも金色燦然として其光彩を減せず、決して彼の銅と鉛との如きではない、人も亦此の如きである。自ら瞋めば勢力豈涯りあらん

やで、今一國の人皆多忙を稱して自ら侮るに至らば、及ぶ所の影響鮮少ならず、多忙の流行も亦實に憂ふべからずとせず。

力は我之を有てば我爲にすべく、人之を有てば人の爲にすべし。力は事功の本なり。

—(世の中)—

茲に力あり、資て我が爲にするは即ち事功を大にするのである。力を利用するの道、孰れの焉に若かん、若し夫れ力の存する所、必ず我と相仇して、決して相與にすべからずは、是れ其力たる適に我の力を銷尅して、我の事功を障碍する所以、是れ



之を折き之を減するあるのみである。故に我に力あり、人に力あり、我の力を以て、有る所の人の力に對す、和親せざれば則ち破碎するのである。

儲は多少運が伴ふにしても、寝て居て儲けたのと働いて儲けたのと少からぬ違がある。

—(實業之世界)—

寝て居て儲かつては寝て居て損せぬと限らぬ。之己れの手腕でなく、福の神の手腕である。思はぬ所に福の神が見舞ひに来て、幾つも金庫が積み重なつたが、何時福の神が立ち走るか測

り知り難い、左様ならと言つては、追驅けても追付かぬ。代りに貧乏神が舞ひ込んで来ては却々な騒ぎである。

成金と女と骨董屋は付き物である。

—(實業之世界)—

骨董屋は人があぶく錢を取つたのを更に巻き上げやうと待ち構へて居る、幾人か骨董屋が棒組みになり、或は成金を攻め落さうとかゝる、之は御前、珍らしいお品でと持ちかける、相棒が之を賞め立てる、成金先生、値切りもせず膺揚に買ひ込んで床の間に置く、骨董屋は的つて舌を出して私かに笑ふ。



若し成金が斯かる事に金を棄てず、金は努力に伴ふものとして、新たに奮發するとなれば、別に發展の道を見出し得るのである。大小の成金が概ね氣が弛まず、幸に儲かつたとして一生懸命に働き出したならば福の神が去つても何でもない、貧乏の神が來てもビクともするを要せぬ。前ほど寝てゐて儲からなくても、儲はあふく錢で無く、確實に富を作るべきものである。

朋友を見るに、明かに惡事たらず、却て善事と見ゆに至り、選擇を誤らざらんこと甚だ難し。

—(想 痕)—

朋友といふこと、之を廣義に解する、即ち無數無限、人といふ人殆んど皆な然らざるは莫し。街頭を歩する、行人織るが如く、車馬憧々として絶えず、皆な互に害すること無く、往くもの、來るものに路を譲りて莞爾たり。演戲を觀、角觥を觀る、場に在る者幾百千、均しく熙々として娛み、謹呼して應和す、その他豪家温戸よりして以て負郭窮巷に至り、若しくは山石を經、水崖を度る、國中何れの地に在りても安んじて遊ぶことを得、即ち國中の人皆朋友なりとして可。或は不虞の變災に遭遇するある知るも知らざるも、應分の義捐を爲して之を扶け、善



事の聞ゆるある、則ち之を褒揚し、悪事の聞ゆるある、則ち之を戒飭す。吉凶互に慶弔し、悲喜相ひ分つに於て、亦た洵に朋友の義ありとすべし。且つ翹に國中の人に對してのみに非ず更に世界人類にまで推し及ぼし、碧眼白哲、又は厚唇黒膚なる人種の來り遊ぶ、乃ち好遇し、懇話し、有無を通じて歡樂す。或は歲歉にして印度幾百萬の饑民坐して死を待つと聞く、立ち或は金を國內に募りて彼に送致し、以て救濟の資に充てしむ。此の如きもの、皆な朋友の形を具ふと謂はざるを得ず。然も是れ廣義に謂ふ所の朋友なり。普通にいふ朋友とは、更に限られ

たる意義に於てし、少くとも彼此互に姓名を知るの後ならんことを要し、一層限られては、尙ほ多くとも互に面を知るの後ならんことを要す。而して其の相知りて朋友と爲るに、部分的なると總體的なるとの二なり。部分的なるに、又其の相交はるの事情並に時日にて等差を生ず。一飲斗升、嗜を同うして朋友と爲り、善談好謔、避を等うして朋友と爲り、合義協約、相ひ共に貨殖を計りて朋友と爲る。此の類は總じて相交はるの事情に従り部分的に朋友と爲る者、其の事情を外にしては曾て相ひ知らざる者の如し。又一旦交はりを結びて後更に之と交はりを絶



つあり、既に絶ちて復た結ぶあり、昨らんとし、物を奪ひたくも奪はず、人を欺きたくも欺かず、自も省みて制止するは、普通世間に見る所なり。而も事の此の如くならず、明かに悪事たらず、却て善事と見ゆるに至り、選擇を誤らざらんこと甚だ難し。甲を觀れば甲は宜しく、乙を觀れば乙は宜しく、丙丁を觀れば丙丁も宜しく、孰れをも成し遂げんとし孰れをも成し遂げざるに終るは、深く戒むべき所に屬す。人事は多く不用意の間に經過し、不用意の間に經過せしめざる可らざるも、承諾とは歸するあるを察すべし。之を選擇するに臨み、敢て誤らざるや

う注意すべし。成るべく承諾せよ成るべくイエスと言へよ。而も拒絶せざるを得ずんば、斷じて拒絶せよ。人に對して然るが如く自らに對しても然れよ。イエス及びハハは口外のみ用語にあらず、口内にも言ふべし、口内に承諾の意義なるイエスを發せんか。飽まで遂行に勉むべし。爲すべからざる事又は爲し得ざる事あれば、ノーと言へ。希はくは人を欺き己れを欺くを見るゝを得ん。

生れ甲斐あるとは廣く人に崇拜せられなければならぬ事である。然し人に崇拜せらるゝのみが生き甲斐あるに非ず。



—(世の中)—

全く名の聞えなくて生れたいけの事を爲し得たのは幾らもある。軍司令官の功名は參謀長の力に依つて成し遂げられた事稀でない。時として參謀長よりも其以下の參謀の力に依つて成し遂げられて居る事もある。而してその參謀の名は聞えぬ。併しその參謀の才能は戦役に缺くべからざるものである。其人が居らねば、或は勝利を得るの困難なる事もあつた。其人は生れたいけの効能を現はしたのである。之と同じく、何處にでも無名の士で人に益したのがあり、益をして居るのがある。各地方そ

れぐ特殊の人がある。村落にも實に尊むべき人がある。少しでも従來の状態より善い方に向けた跡があれば、皆生き甲斐があるとするべきである。

實力を以て虚勢に勝ち、實質を以て虚榮に勝つは、啻に人生の職分なるのみならず、其の最大愉快の一なり。

—(世の中)—

天下の政權を争ふより、八公熊公の腕力を關はすまで、一も然らざるなし。必ずしも愉快を感ずると思はず、或は公憤なりとし、義理の爲めなりとし、已を得ざるに出づるとし、能ふ限



りの苦痛を忍ぶも、苦痛の裏に自ら慰藉して満足するの愉快あり。

支那革命は種々の原因よりし、重きを個人の活動に置くべからざれど、個人として崛起せる者は、果して如何なる意志を以てしたるか、個人としても面の如く心の違はんが、満朝親貴の無能にして、権力を握るに快からず、彼れ取りて代はるべしと爲したるあるべし。支那は歴代を通じ、彼れ取りて代るべしと思想の替はらず、項羽が始皇の鹵薄を觀て此言を發せしと傳へらるも、此に先んじ、湯武以下戰國の鷄狗まで、殆ど同思想

なり、壯なる哉、彼れ取りて代るべしといひ、力を盡くして取りて代らんとし、誅死する者の多かりしと共に、能く目的を果したしは者も少からず、其の檄文には、民を塗炭の苦より救ふべきを説き、又た眞に之を信じて努力せしあれど、虚勢を張りて威壓を事とする者に反抗し、其の屏息するの餘儀なきに至れるに愉快を感じる無かりしとせず。

社會の事物は甚だ複雑にして、門閥、士閥、閥閥等、幾種の閥の錯綜し、個々人々各自の實力に相當する位置を得べくも非ざれど、新たに亂の平ぐや、比較的自自由競争の結果として、比



較的實力と位置との權衡を得るが、泰平の續きて形式の加はり形式に形式の累るや無能の者の高さ位置を占め、多くの有能者を奴僕視し、實力に於て冠履顛倒の奇觀を呈するを免れず、世間の多數は權勢に阿附し、特に怪む所なくして經過するも、中に事の餘りに滑稽なるを認め、一朝機會を得れば、幾重の形式を打破し、暴慢者流を懲らさんと欲するあり、支那の革命は何様に終結するやの明かならず、旗を擧げし者が犬骨折りて鷹に取らるゝも測られざるも、彼等は實力なくして百官を進退せし者を一掃し去りたる所に愉快を感じせん。

美酒佳肴も慣れては別段の愉快にあらず。

——(世の中)——

同じく人間に生れたならば、愉快な生活を送るがよい。不愉快な生活を送つては仕方がない。誰々は愉快である。誰々は不愉快であるなどと言ふが、愉快、不愉快は何を以て極めるのか。當人自ら愉快とし、他人より見て不愉快なのがある。土方なり立ン坊なり、さぞ不愉快の事であらうと思はれるが、當人自らなか／＼さうでない。一二合の濁酒で、活惚れの眞似をする所實に愉快至極に感ずるのである。之に反して、金殿玉樓、何の



不足ない所に無限の愛ひの潜むで居る事がある。併し、一般に土方、立ン坊を不愉快とするは、欲して得ざる所の甚だ多いと認むべきに依る。佳い肴を食ひ、美しい酒を飲まうと思つてもいかぬ。金あらば自由に出來る。

處で、金があつて佳い肴を食ひ、美しい酒を飲めば、それで愉快であるかと言へば、飲み食ひの六つかしかつた者が、美しい肴を飲食ひすれば、愉快であらう。が、美しい酒、肴に慣れて居れば別段に愉快に感せぬ。更に一層美しい酒肴を求める。併し之も慣るれば、愉快を感じなくなる。更に更に勝つて美しい酒肴

を求める。之も慣るれば何んでもなくなる。酒肴の好いと言つても限りがある。大抵の所で得る事が出来なくなる。酒肴に不自由のない者でも、さう特別に美味しいのを食べて居らぬ。僅かばかり料理の變つて居る位のものである。

女も、人の欲する所、美なるが上に美を求める。併し、美人でも毎日傍に居れば鼻につくやうになる。アラが見へる。取替へる。取替へても面白くなくなる。之も略、限りがある。金にあかして美人を求めた所にも、さう大した美人がない。家でもさうである。借家住居の者が、新たに家を建築するのは愉快で



あるけれど、慣れれば模様替へでもしたくなる。大きくもしたくなる。別荘も欲しくなる。愉快に思ふのは、當分の事であつて、慣れると一向愉快でない。立派な建築とても限りのある事である。

普通の生物は宇宙に比ぶれば實に眇たるものにして、殆んど言ふに足らず、然して宇宙よりも晩現し、早滅する運命を有す。

—(宇 宙)—

地球が、まだ星霧の状態から全く脱せず熱の強かつた頃に、

生物は無かつたものである。又、地球が冷却して月の如くになつてしまへば、生物は其跡を絶つてしまふ事になる。假りに、群星中には地球よりも早く進歩し又永く開化を續けるものがあるとしても、その星にある生物は矢張り宇宙より存在の期間の短いものである。生物は宇宙に比して頗る小さいのみならず、その存続の時間にも亦際限がある。

宇宙の活動は無始の太初より無限の永遠に亘り、その生命は不窮なり。

—(宇 宙)—



原生界の生命と副生界の生命との間には、非常なる懸隔がある。この壽命の長短と形の大小とによつて、普通の生物を宇宙より區別し、便宜上、宇宙全體を總括して原生界と謂ひ、普通の生物を總括して副生界と謂ふのであるけれども、道理の上から謂へば、普通の生物とても宇宙の一部たるに過ぎないのである。

生命とは一種の力なり。

—(字 宙)—

獨逸人のヘルムホルツや英國人のウキリヤス・トムソンは、

生命は力であるに相違ないが、熱とか電気とかと、全く別種の力であるを唱へ、學者のうちには又、生命をプラズム的と稱せられる。化學作用であると説くものもある。然し、これとてもヘルムホルツやトムソンの説いたところに、新たなる名を與へたまでである。又トムソンは他の星が破壊して地球に飛んで来て落ちた時に、他界から生物の種を移植したのが源だなども、唱へて居る。斯く生命に關して疑義の多いのは、普通の力が如何にして生命と稱せられるかに變ずるかを知り得ぬからだが、今日の知識で判明しないものは、單に生命の問題のみでは



ない。殆んど無数にある。普通生物の生命に就てさへ、既に爾く不明であるものとすれば、宇宙全體の生命に就て、之を明瞭に知り得ぬのも當然で、これが、宇宙の有機體で無いと謂ひ得る理由にはならない筈である。

手足がなく内臓の働きが無くなつても人間は依然として人間なり。

—(世の中)—

有機體の本来本元は人間であるが、手足が外科手術で切斷されたり、臟腑が疾病の爲めに其作用を停止せられたりしても、

たゞ生命の主體たる自我がありさへすれば人間であるのである機關は人間と稱する有機體に必ず無ければならぬと云ふものでない。又人間のみならず、其他の物ととも、その形態が何うであらうと、意識があらうが無からうが、生命の主體たる自我さへあれば、矢張り有機體である。

大なる天才の常に出づべくも無く、百年に一人なり、小なるは到る處に之れ有り。

—(想 痕)—

圓なるもの、方なるもの、齊しく教場に列し、齊しく業務に



就き、圓なるは方に近似し、方なるは圓に近似し、相率ゐて尋常一様の群に入る。幸に境遇に適し、圓は愈々圓、方は愈々方ならんか、茲に始めて天才の顯はるゝを見んも、何處に境遇の適當なるあるか、漠として知るべからず。世の謂ゆる順境なる者、必ずしも天才の境遇として適當ならず、謂ゆる逆境なる却て順境なることあり。天才を養成するは、横綱を養成するに較べて更に幾段か難たし。何處より如何なる大人物の出づるか唯だ偶然に現はれ來るを待つべきのみ。

學校の教員は一體に馬鹿者なり。

—(世の中)—

學校の教員は多く何んといふ事がないが、それでも氣だけは若い。それは毎日、子供を相手にして居るからである。けれども、それは上ツ面の、只バツとして若いだけで頭は矢張り固くならうと傾くのである。種々な方面に能が利かない何物をも感じ、新しい物をもドン／＼受け入れるといふやうな力が鈍いだから、若い者と交はれば總て若くなるといふ事は言へない。彼等は唯漠として無邪氣であると言ふだけである。それに學校の教員は、其の學校に來て居る時は多くの若い者と顔を合せ、



それらを相手にして、話して居るから、自然に氣が若いやうであるが、極り切つた仕事を極まり切つてするので、眞に若々しい所が少い。それを見ると、大隈侯とか、伊藤公とか言ふ人は境遇で常に何か新しい仕事をしなくてはならないから、止むを得ず、元氣が現はれる。周圍で餘儀なくされるのである。伊藤のやうに朝鮮へ何邊も行く元氣が付く。大隈は始終野に立つて盛んにやつて行くので益々元氣が付くのである。それに較べると、大學教授杯は随分年も若く、そして智恵の出ざかりの二十四五位の者と一緒になつて居るのでモット若くて好い筈で

あるが、其實因循な人が少くないのである。  
要するに、如何なる人が青年にして如何なる人が老人かと云ふことは一概には云へない。

知識は歳を追ふて積み重ねられ、充實擴張せらるゝものなり。

—(宇 宙)—

今日の智識が昔の知識よりも優つて居ることは明な事である。これによつて將來の知識は現代の知識に優るべき筈のものである。



時には天才が現れ、突如として以太利人キユーリー夫妻が、一千八百九十八年にラヂウムの如きものを発見したとか、或は又、忽然、ヘリウムの如き新元素が英人ロッキヤーによつて那威の礦物中より一千八百六十八年に発見せられた様な、又、軍事上の關係から、無線電信電話が急速の進歩を遂げたとかと謂つたやうな例がないでもないが、普通の順序から云へば、知識は時代の経過を待たぬと、充實擴張せられぬものである。

人間には、不思議に錯綜せる萬有の諸象を渾一し、その間を一統する觀念を有す。

—(字 宙)—

宇宙なるものは獨逸人ヘーゲルの謂つてる様に、それからそれへと蜘蛛の手に張られた併も容易に破ることの出来ない一種の網に似たものである。何方からでも聯絡を辿つて行けば必ず辿り得られるもので、一貫した理路は此處にもあり、彼處にもあると謂ひ得るほどに多くあり、脈絡に際限は無いが、この際限の無い無數の理路の間にも猶ほ一定の脈絡を発見し、體系を作り出し、渾一の觀念を得んとするのが人間の情である。

壓迫の強くして奈何ともする能はずと言ふ者あれど、何處



にも多少の壓迫なきはあらず。

—(想 痕)—

壓迫は遂に免るべきに非ず、鳥飛びて空氣の壓迫を感せんも空氣なければ飛ぶを得ず、魚遊ぎて水の壓迫を感せんも、水なければ遊ぶを得ず、壓迫なきの自由は、殆ど全く夢想に屬すべく、壓迫に堪へ、壓迫を凌ぎ、而して尙ほ志を枉げざる、茲に精神の自由ありとす、遠き將來を別として、過去、現在、及び近き將來は、自由を得ざると、能く壓迫に堪ふると否とに在らん。貴ぶべきは自力的自由なり、他力的自由なり。

萬世一系の萬代の天子にも、蘇我氏の壓迫あり、藤原氏の壓迫あり、平氏の壓迫あり、源氏の壓迫あり、北條氏の壓迫、足利氏の壓迫、徳川氏の壓迫あり、承久の亂、廢立の上、上皇新院中院並び流され給ふ、建武の亂、南朝北朝相ひ争ふの避くべからざるに及ぶ、朝廷の政權を失ひ、廷臣の惴々焉幕府に從へる數百年、而して後ち漸く維新に接せるが、畏れ多くも、先帝陛下は京都に在らせられ、不自由を忍ばせ給ひたらんと恐察し參らす、忍耐に潛勢力の伴ふ、後日の盛運は豈に偶然ならんや。



己れの方で、己れの運命を開拓せるものは安心する所が多い。失敗しても失望せぬ。振ひ起る希望に満ちて居る。

—(世の中)—

人の力に依つて位置を得た者は、其人の浮沈と共に、浮沈し動もすれば、みじめな目に逢ふ。或有力者の巾着となり、榮耀榮華、飛ぶ鳥をも落とす勢であつたのが、其人の死すると共に何處へ行つたか分らなくなるのがある。人の力で奢り散らし、人の力を失つて奢れなくなり、日蔭の身となるのは、自ら不愉快を感じることに甚だしく、人よりも不愉快の甚だしきものと思は

れる。平沼氏の養子延次郎が、養父の力で金満實の身分となつた、相場に手を出して失敗したが、家の財産から云へば、何程の事が無い。併し養父の怒りを如何ともすることが出来ぬ。金はあるが、自殺するの止むを得ざるに至つた。其死を決する迄頗る懊惱煩悶した事であらう。

それと反對に自分の力で自分の運命を開拓するものは、たとへ小なる小間物屋でも、八百屋でも愉快に安心して居られる。一朝失敗しても悲觀することがない。又振ひ起る事が出来る。少くとも振ひ起る希望に満ちて居るのである。



威武に屈せざる人にして始めて威武を備へ、力を振ふに堪ふべく、富貴に淫せざる人にして始めて富貴に居り、業を成すに堪ふべし。

—(想 痕)—

威武に屈するは氣力なきの徒、富貴に淫するは氣魄なきの徒。威武に屈し、富貴に淫する民族は、世界の強國を形づくる能はず。

威武を以て臨めば直ちに屈従し、黄金を以て臨めば直ちに叩頭するが如き、政治を施くの甚だ容易なれど、外に對して戦々

兢兢たらざるを得ず。

判断せずして何處となし理解せられるのが常識である。

—(世の中)—

ナポレオンは戰場に臨み利害を計る事頗る審かである。必ずしも先づ必勝の算を立てる。而して時として彈丸雨注の間に眞先きに進む。一丸中ればそれまで、ある、大將として輕卒のやうである。

併し、徐ろに人に語つて言ふやう、彼の場合何處に有つても同じく危険である。故に場所を選ばぬのである、と。餘り衛生



を重んずるものは身體が弱くなり或は病氣に罹る。常識は人の世間に立つ上に於て最も肝要であるが、餘りに常識を念として過不及無いやうに努むるのは生きて居るも、死んで居るも變らなくなる。常識に際限がない。其最も上乘なるものに至つては絶えて無くして稀れに有ると云ふべきである。

無理と知りつゝ陰忍し、地頭に於て無理と知りつゝ之を壓伏するも無理の無理たるは掩ふべからず。

——(想 痕)——

泣く子と地頭に勝たれず、無理が通れば道理が引込む。先づ

威武を以てし、次に恩を以てせば無理の通るの少からざれど、天定りて人に勝つとあるが如く、晩かれ早かれ、引込める道理の無理に勝つを豫定すべし、何處にも、正論の必ずしも勝たず幾年も壓屈せらるゝあれど關係社會若くは關係團體が衰滅の運に就かざる限り、是非曲直の順序を正だすに至るべきや必せり、若し永遠に壓迫せらるゝが如き、其の社會若くは團體の滅亡、期して待つべし。

人の世に處する、幸にして成功するあり、不幸にして失敗するあり、成功は必ずしも力量の尺度たらざるも、多数の



上にて爾か見做すことを得べし。

—(想 痕)—

成功する者は或る例外を除きて力量の優り、失敗する者は或る例外を除きて力量の劣れるならん。されど他より觀て成功とする所、當人自ら以て成功とするや、他より觀て失敗とする所、當人自ら以て失敗とするやの頗る疑はしきことあり。他より觀て成功とし失敗とし、已れも以て然りとするの多けれど、己れ以て然らずとしては生を終ふる者も亦た之れなからず、從來の例に徴するに、他より觀て成功とし、已れも同じく然りとする

者の事業は、寧ろ凡常普通、概ね記憶するの價値なし、固より稱すべきの事たるを失はざるも、以て偉として驚異するを得ず其の尋常に異なりて歴史に傳はるは、成功失敗の判然たらざるが多し。

空間も無限、時間も亦無限なり。この無限の空間、時間の中に在つたもの、在らんとするものを悉く知らうとしても、夫れは不可能なり。

—(宇 宙)—

今日、眼に觸るゝ星辰の團體以外に、他の團體があるかも知



れず、又無いかも知れない。或はかゝる團體が頗る多くあつて夫れが集まつて更に絶大な團體を成して居るものやら、其邊顧と見當がつかない。いづれにした處で、宇宙全體の過去現在未來を知るのには不可能なことである。

瓦斯狀の星霧が、變化して今日の星になつたことは必ずしも推知するに難からずであるが、星霧になる以前は果して如何なるものであつたか。素より無より有を生ずべき筈もないから、或は眼に觸れぬやうに活動しつゝあつた何物か、星霧に變じたかも知れず、或は現在の星のやうなものが破壊して瓦斯體の星

霧に變じたのかも知れない。要するに、無限の過去に於て、宇宙に如何なる變化のあつたかは、今日に於て之を究むることが出来ぬのである。

生物活動の元基たる生命は實に妙不可思議なるものなり、然して宇宙は生物よりも更に更に不可思議なるものなり。

—(宇宙)—

人間が宇宙を目して不可思議なりとし、之を知るのを人智の到底及び難いところだとするのは、敢て怪むにも足らぬが、その大部分を死物の如く心得、生命なしとするのは、妄斷も亦甚



だしいと謂ふべきである。人間には兎角、自分に近いものを優れりとし、遠いものを劣等視する惡るい癖がある。

支那では其昔、宇宙の元基を木火土金水の五行、即ち、五元素であるとし、草木をさへ生物でないかの如くに考へたものである。又、希臘のエムベドクレスは、宇宙を以て地水火風の四元素より成るものとしたが、近世に入り分析術の進歩すると共に、從來元素なりとせられたものも分析されて、其中より新しい元素が発見せられる様になつたので、五十餘年前まで六十有餘しか無かつた元素の数が、昨今では約八十に達して居る。

然し、元素を無生物視する事は、昔も今も依然として變らず、時に、元素にも凝聚力や抵抗力のあるのを觀て、生命らしいものが有ると解した者も無いでは無いが、何れも生物の生命とは同日に語り難しとしたものである。加之、生物は死すれば皆な本來の元素に還元してしまふので、今日まで諸元素を死物扱ひにして來たのは當然であるとも云ひ得やうが、近來元素に關する攻究は一段の進歩を遂げ、從來元素を構成する原子は如何なる状態の下にも決して變化するもので無いとせられあつたに拘らず、ラヂウムが発見されて、輻射能に關する實驗の重ねられ



ると共に、原子も亦變化するものである事が知られるやうなつたのである。

物を玩ぶならば、宜しく志を喪はぬ範圍に於てす可きてある。

—(世の中)—

生來、力に富んで居る者は、元氣旺盛である。殊に青年の折には、その旺盛なるを、禦ぎ切れず、女なり、酒なりに使ひ棄てる事がある。力の餘つた故でもあるが、たゞ力を棄てるのは有用の水を以て家を推し流すやうなものである。併し青年の時

は、先きが長くて如何やうにも快復し得る。漸く年齢が長ずると、初め大事業を起さうと云ふ志であつたのが、金の爲めなり、骨董なりの爲めに力をそゞいだりする。金の貯蓄は決して悪くない。骨董を集めるのもよい。併し、その爲めに折角の志を弱むる様になつては力を適當に使用し得たものと云はれぬ。金は事業を爲すに必要である。何程でも貯ふべきであるが、肝腎の目的を忘れてたゞ手段に拘泥するやうになつては憐れむべきである。光林の二百萬圓を使ひ棄てたのは洪水になつて家を流したやうな者であるが、それに比ぶれば骨董いちりの方がよ



からう。或は爲めに國家の寶とすべき古物を保存する事も出来よう。併し、結局隠居仕事でありはせぬか、元氣の旺盛で大事業を成し遂げやうとする者の堪へ得るものでない。

随分、力に富んで居る人で、別段、事業を仕遂げずに終る者あるのは、力を適當に費さぬ所から萌して居る。玩物喪志と云ふ語があるが、玩物は必ずしも悪しとはせぬ。玩物で愉快を感ずるならば、愉快は健康を保つ所以としてこれもよい。併し志を失ふのを如何にするか。

宇宙總體の絶大なる者より觀れば、眇たる地球の圈内に聳

居して自ら英雄豪傑を以て傲るは、即ち小の小なる者と謂ふべく、如何に其の志を大にすとも、事知るべきのみ。

—(想 痕)—

宇宙の大なるを以て世界の小に較べ、更に一洲一國一郡一郷より以て一人の微に較ぶれば、其の愈々言ふに足らざるや此の如しとはいへ、志の大小を度るべきは、亦た實に茲に在り、我が地球は此の如く小なる者なり、而して造化の力の奪ふに非ずんば、到底是が圏外に出づる一步なる能はざるも、而も吾人々類は此の不可測的廣大なる宇宙間に在りて、特に生を眇たる



地球の中に稟けたり、其の生を此處に稟けて蒸々として群息するは、實に不可思議なる運命の下に在る者と云ふべし、即ち渺たる蒼海の一粟の其の一微分子にも過ぎざる處に寄生するの、絶奇々遇たるを推すべからざるか、此間に在りて相争ふは、蝸牛角上の争に比して更に遙かに小とすべく、將た此間に生れて徒らに争鬪するは、如何にも境遇を知らざるの妄舉とすべし。

使ひをして要領を得ずして歸るものは望みがない。三十七百八

—(世の中)—

世間では要領を得るのをよく言つたり、悪く言つたりするが用事の上で要領を得るのは善くに極つて居る。子供の使ひのやうであるとは要領を得ずして歸るのを譏るのである。使ひに行つて只歸へつて来るのには困る。子供でも無い者が、さう云ふ調子では仕様がなない。だから用事の上では要領を得なければならぬ。何處でもさう云ふ人を求める、用事を吩咐つて先方へ行つて只歸つて来ると云ふ者は餘り望みがない。用事を吩咐つて必ずそれを果して来る、如何なる場合でも目的を達すると云ふ者は實に重寶である。商店ばかりではない。四方に使いして、



君命を辱かしのせずと云ふ事は、昔から大事な事になつて居る。  
人格高ければ金銭なきも可なり。

—(人世の中)—

鈴木藤三郎は、一時の勢、大したものであつた。而も今は身を勞働者と共にして働いて居ると云ふことである。氏の人格にして、會つて、或一部の人の認められしが如くなれば、何程か恢復するの時機があらう。若し遂に恢復し得ぬならば、人格に缺けて居る處あるを證明するやうになる。人格の信すべくんば早く成功せずとも、會つて信用せられた程、信用せらるゝに至

るべき筈である。

子供の時は善く言はれたり悪く言はれたりする事でその働  
きが違ふものであるが、廿歳にもなればその効能が無くな  
る。

—(實業之世界)—

人は子供の時、善く言はれたり悪く言はれたりする事で大變  
體きが違ふ。即ち褒美を貰つたり、叱られたりするものが直接に  
利目がある。處が漸く廿歳頃にもなればその効能が無くなる。  
善い子ちやと云はれたり、灸を點ゑると云はれたりしても、テ



ンデ馬鹿にして相手にならぬ。が、廿歳にもなればそれ相應に譽められて勵み、叱られて慎むやうな事がある。教師に譽められたり、雇主に譽められたりするの随分勵みになる。小言をいはるれば畏こまる。が三十になればそれが違ふ、四十になれば愈々違ふ。前に譽められて喜んだことも喜びはせず、前に小言を言はれて畏つたことも、聽いて嘲つて居る。五十六にもなれば尙更である。

經驗に越した人格修養の方法に勝るものなし。

—(世の中)—

人には天性と云ふものがある。天性強いものもあれば、天性弱いものもある。弱い者が無理をして戦つて行くと掛け換へのない身體を損ふ事になる。此處で弱い者は、成るべく誘惑を避けるやうにして行くが宜しい。即ち自ら誘惑に陥り易く、それを切り抜ける事が出来ないといふ自信のある者は何處までも進んでブツ突かるが好い。

天稟の資質を啓發するに、四圍の情勢を以てせざるべからず。

—(想 度)—



徒らに王侯となり、大將と爲るの心を抱くも、其の器に非ずんば以て其の心を遂ぐる能はず、又其の器其の心に稱ふも、其の時に逢はずんば以て其の心を遂ぐる能はざるなり。

不爲の器を懐いて絶大の企圖を畫し、而して起初未だ成るに及ばずして、偶爾事に逢ひ阻礙せらるゝ者あり、廟廊の才を蘊み、文語の術に長ずるも、變動紛亂頻りに起るの際に生れたるを以て活功を立て偉績を垂るゝに由なく、輔他の顯世に認めらるゝに至らずして身を没する者あり、或は戡定幹蠱の略、拔山倒海の勇あるも、靖康の代、武を偃せ文を尙ぶの時に生るれば、

以て武功を樹て謀略を施すに地なく、凡庸と伍して碌々世を終るを免れず、人之を發始し、冥眇を闡明するの宏智を蓄ふるも草昧の地、書籍器械無き邦國に生るれば、學藝文章之を後代に傳へて百世に炳焉たらしむる能はず、竟に何の用も爲さずして終るべきのみ、徒らに偉大なる希望のみ懷きて銳意遂行に瞞むるとも、其も其の器に非ず又其の時に非らざれば、竟に功を見ざるべく、特に漫然希望を高大にするに過ぎざるは、單に一の妄想にして、夫の夢みる者と何の異なる所なし。其の稱して立志とするに足らざるや明かなり。



名將と凡將とは猪突猛進すると否とによつて別る。

—(世の中)—

名將と、凡將との差は、戰略戰術に通じて居ると否とよりも、或頃合を見計つて、猪突猛進すると否とにある。猪突猛進して、敗れて死んだものもあるが、猪突猛進するの資質を備へずして、名將となつたものは一人もない。上杉謙信は、軍人として天才であつた。一旦機會が來れば、單騎突進するを辭せずして大軍を統率する技倆が無かつたのではない。

職とする所を職とす、則ち立志たるに於て些の優劣あらず

—(想 義)—

一邑に與る卑職といへども、營々として務めて怠らざれば、以て其の分を果たすものと謂ふべく、夫の帝王と爲りて一國に君臨し四海を統御すると、人事を盡くすに於て相軒輕する所ある無し、孔子の委史となりて會計當るのみといひ、乘田と爲りては牛羊遂ぐるのみといへりしは、即ち是である。委史は卑官にして、乘田は小職たれども、會計は必ず無かるべからざるもの、牛羊は決して缺くべからざるもの、無かるべからざるの職に居り、缺くべからざるの物を管し、而して屹々として其の務



に服事す、志に於て他の民を統ぶると、何の差別か有らん、  
要するに己れの職をする所を快とし、敢て之を曠くせざる、皆  
な齊しく稱すべしとす、此の如き者が多きを加ふれば、其の加  
ふる丈け社會は益々進達すべく、而して個人に在りては、其の  
職に阻むるに因りて益々其の事に長ずるを得、俚諺に謂ゆる—  
—好きこそ物の上手なれ——と云ふを、殆ど總ての事に於て認  
めん、社會の人皆な其の職に阻め、其の事に長ずるに及べば、  
社會の力は更に伸張し得べし。

普通人の求むる所を求めつゝあらば、即ち普通人のみ。普

通人の求める所を捨て、然る後に普通以上の事が茲に出来  
得るなり。

ト(實業之世界)——

普通の人の求める所を求めて居れば、普通の人だけのことし  
か出来ぬ。普通の人の求める所を捨て、然る後に普通以上の事  
が出来ぬ。然し普通は悪いことではない、常識は普通の人の備  
へる所であつて、何時でも常識を缺いてはならぬ。非常識の事  
を取てすべきでない。然し茲に犠牲といふことになる時と  
しては普通に従ふことの出来ぬ場合がある。然しそれは已むを



得ざる時には已むを得ざるに出づるより外はない。且つ無暗に利を求めたるが普通であるか、無暗に名を求むるが普通であるか同じく普通に從ふならば、己れ一身の爲にするよりも、同胞の爲め世間の爲にするを賞せねばならぬ。元來犠牲と云ふことは我國が歐米と交通して以來行はれ來つたのであつて、耶穌の十字架に掛つたのが犠牲の主なるものとせられた。犠牲、献身と云ふ語は實に歐米に負ふ所がある。

併し犠牲といふ語は早くから東洋に存在してゐる。殷の湯王の治世早魃五年したので湯王が自らを犠牲にして天地に禱つた

ことがある。而して孔子の語に、身を殺して仁を爲すと云ふ如きが幾つもある。若し古來、人に犠牲的行爲として見るべき事がなかつたならば、歴史は甚だ殺風景であらう。近い所で乃木大將は犠牲の著るしい例である。木村徳田澤田中尉の飛行機で死したのも犠牲である。大小はあるが犠牲の例を求むれば幾程もある。悲惨なことがあつても人事に美しさを感ずる。議論は色々であるが、世に犠牲的行爲が無くつては人が生き甲斐を感ぜぬであらう。大體に於て部分に於て人は死して生きると云ふやうな所がある。



己れ一身の爲めに痾癘玉の破裂させる者は、總じて器の小さいものである。

—(世の中)—

痾癘玉の破裂さす可きは不正に對してある。不人情に對してある。時として之が爲めに、前後の分別がなくても差支へない事があるが大抵はよく前後を考へ痾癘玉の應用が宜しきを得て居ないと、んだ失敗を招く、そして其爲めに損をするけれどもそれは自業自得で仕方がない。こう云ふ人間は度量の小さいものに多くある。

志一たび立てば、則ち死か勝利か其の一を擇ぶべきのみ。

—(想 痕)—

立志は個人にありて最要至緊なるもの、事の成否主として此に因るは人皆な之を知り、薄志弱行の成業する所以に非らざるも亦皆な之を知る。是に於て漫然立志といへば、事甚だ簡單のやうであるが、更に細密に考ふれば、愈々入りて愈々深きを着るのである。

志を立つる素と一に限らない、或者は政治家たらんとし、或る者は軍人たらんとし、或る者は學者たらんとし、或る者は



工業家たらんとし、その他百般の業務、各々其の好む所を擇びて従事する所あらんとする、且つ同じく政治家たらんとする、軍人たらんとする、學者たらんとする、工業家商業家たらんとする、各個に就て類別せば愈々出、愈々多く、志ざす所の個々相異なる、宛も其の面の異なると同じく、各自其の是とする所を是として身を此に委ぬ。而して中に就き孰れが優孰れが劣なるやは、概ね其の事の何たるに因りて判るゝに非ず、苟も爲す所にして愉快の感と義務の念と兼ね存するあれば、其の人は即ち當然の事を爲せる者とすべし、之に反し、其の爲す所に不愉快を感じ、厭ひつゝ睡むるは、即ち事に役せらるゝ者にして卑屈の行爲と謂ふべく、又單に一個の愉快を感せしむべき事を選択して之に耽るは、理の以て慾を制する能はざる者にして、陋劣の行爲と謂ふべし。其の爲す所に愉快を感じ、而して分應さに睨むべきを念頭に銘し、安んじて業務に従事する、乃ち事の何たるかを問はず、一として是ならざるは莫けん。

出来るか出来ぬか分らぬ時は出来ると思へ。

——(世の中)——

三代將軍家光は、鎗術の相手が誰れでも負けるので、よく己



れに及ぶ者は無いと心得、力自慢で仕末に終へななんだ、そこで大久保彦左衛門が、阿部豊後守をして之に一撃を與へさせたといふ事がある。家光は道に明君であつたから一度は怒つたけれども次で己の力の及ばざるを悟り、深く慎むやうになつた。世の中には豊後守の一撃を受けずにその儘善い氣になつて居るものが少くない。

併し時として出来るか出来ぬか分らぬ事がある。さる場合に出来るか信するのが力を加へる事になる。確信は確かに一の力である。

成功は人の好む所、失敗は人の惡む所、成功は凡べてを語るといふは事實にして、細工は流々仕上げを見よといふも亦た眞を得たり。

—(想 度)—

仕上げにして善きを得ば、事茲に決す、成功は何の點よりするも、唯だ可なるを見て不可なるを見ず。成功の何たるやに就て議論區々に分るゝも、普通に解釋せらるゝ所に從ひて差支なし。

人と交はるや、惡友なると否との知り難けれど、良友のみ



に非ず、時に眞の悪友あるを豫期せざるべからず。

—(世の中)—

而も常に自ら磷せず緇せざるは勿論、成るべく之を感化して良友たらしむるに務むべし。縁なきは度すべからず、如何なる人が如何なる手段を以てするも感化する得ざるあれど、亦た多少遷すべき無しとせず。遷すべきか、遷すべからざるか、豫め知るに由なく、唯だ試みて然る後に知るべきのみ。試みて何の得る無きも、自ら爲すべきを爲せりとして満足すべし。故七里恆順師は忠相上に何の貢献するなかりしも、人を感化するに妙

を得放蕩兒を謹慎せしめ、盜賊を正業に就かしめたる、三四のみに非ず。悪人は多く境遇の爲めに正道を履むこと能はず、善人の境遇に在れば、少くとも善人に近からんとする者なり。志あらば悪友を避くること無く、寧ろ大に之を迎へ、化して善人たらしめんとすべし。但だ人各々職業あり、皆な悉く感化事業に専らなるを得ず。感化する所なしとて何の咎むべきなけれど、得べくんば、悪友と交りて之を良友とするに勞すべし。務めて効果なきは、縁なきが爲めなり。己れの人に忠なる所以に於て缺くるあらず。戦々競々として悪友を恐るゝは、稱すべ



きに非ず。世の交友なる者を観るに、各々類を以て集まり、政客は政客、商人は商人、博徒は博徒、掏兒は掏兒、或る區域を限りて親友とし知友とする所あり。局外よりして悪友と見るも當人同士相ひ互に良友として益を得る所あり。姑らく紳士に限るとするに、若し自ら信するの厚くんば、卑劣漢破廉恥漢を除くの外、何人と交るとも妨げあるなし。意見の爲めに争ふは飽くまで争ふべきも、漫りに良友悪人として牆を作るは面白からず。世間に鬼なしといふ。鬼ありとするは、或は疑心より生ずるなからんや。死神鞭氏と故星氏と相ひ友とし善かりき。而も

星は公盜の名を博し實際名の如きを犯かし、も、神鞭は當て與からず、且つ政見に於て抵排するを怠らざりき。神鞭が星の言を聴かざる、星が神鞭の言を聴かざるが如し。或る意義に於て互に磷せず緇せざりしとすべし。是れ交友の宜しき者なるも、若し孰れか一層志の厚く、一層能力に富みしならば、他の一方を感化して同臭味に變せしめしならん。神鞭氏は自ら爾方言へることありき。悪友と交る勿れとは、主として少年に言ふべき事、長ずるに隨ひ、稍々取捨する所なきを得ず。無垢の少年期、赤に染むべし、青に染むべし、即ち成るべく悪友と交らし



むべからず。悪友といふも頗る單純、いはゞ學校より放逐され  
感化院に送らるゝが如きをいふ。不良少年なる者は、少年の務  
めて交際を避くべき所とす。されど既に成長し、赤色を帯び、  
若くは青色を帯び、獨自の意志を以て獨自の活躍を敢てするや  
悪友を避くるが如きは事の末に屬す。良友は可、悪友も不可な  
しと覺悟せざるべからず。近來人の頻りに修養を口にする可の  
爲めぞ。世に立ちて惑ふ所なからんを欲するに非ずや。數名の  
悪友に邪路に誘はるゝの有様にては、修養の力なきも餘りなら  
ずや。悪友あるも、悪友多きも、將た交る所の盡く悪友なる

も、遂に何の憂ふべきぞ。獨り磷せず緇せず、尙ほ進んで感化  
するあらんとする、偶々修養の厚きを見ずや。交友中に良友あ  
り之を得るは其人の大なる幸福なるも、之を得ずして却て悪友  
の甚だしきを得る、男子たる者尙ほ深く悲むべからず。さはい  
へ、酒匂氏の悪友と交る勿れといふを以て子女を戒めたる、甚  
だ善し。子女を戒むる宜しく此の如くすべし。而も以て成長せ  
し者を律すべからず。

人は己れ自ら如何の地位に在るかを考ふるを要す。汝自ら  
を知れとは古今を通じての名言なり。



己れの世に誓ひし所の果して完成せるや否や、僅かに緒に就きしのみにて、今後如何に變ずるや測られざるなきや、其の緒に就きしといふの多數人の助力に依り、己れ唯だ少しく斡旋の勞を取りしに過ぎざるに非ずや。此邊宜しく深く察せざるべからず、凡そ名譽は事實實力に副はんことを貴ぶ、此に副へるは強ち拒むべきに非ざれど、其の副はざる嫌あるは斷じて之を拒むべし、事實實力に副はざる名譽を受くるは、人の嘲笑を促すべきなり。

——(日本及日本人)——

人を使ふには使はれねばならぬ。

——(世の中)——

一家の主婦でも、下女を使ふのは使はれるのである。使はれねば使へぬのである。何方か人の思ふ様にならなければ、其人を使ひ難いものである。

服従は或る點に於て美德なれど、獨立して能力を發揮するは、此に劣らざる美德にして、後者の多からずんば、社會の發達を期する能はず。

——(日本及日本人)——



國務大臣に敬意を拂ふべきを教ふるも、更に其の上に出て得るを教へずんば、將來の國民は固定して發達せず、發達するも速度の遅し、治め易き國民と爲るも、富まざる國民、強からざる國民、精神の餒るし國民たるに終らん。

色と慾とは火の如し。

—(世の中)—

金は人生の手段であつて目的でない。色と慾は火の如きものである。必要でもあつて、ウツカリすると火事になる。若い者は色を誡め、老いたる者は慾を誡むべきである。

一時に人氣の熾點と爲れるは危し。

—(題言集)—

古來人事を成し遂げし者にして斯かる類のもの少く、概ね評無評の世若しくは毀譽褒貶の間に歩し、久しくして漸く目的地に到達し、贊成者も反對者も奈何ともすべからざるに及べるなり、徳川家康の如き、嘗て大に人氣を負ひしことなく、蒲生氏卿は以て天下を取るの器にあらずと明言し、人亦た多く之に和せし程にて、決して人氣者と謂ふべからざりしが、而も猶ほ能く霸業を成し、之を三百歳に傳へたり、當時人氣を收めし者を



求むれば、寧ろ他に存せしに非ずや、而して人氣は一時的なるの多く、之を得るの早きは、之を喪ふも亦早し、凡そ世間に流行するの速かなるもの俗諺に若しはなく、ストライキ節の如きラツバ節の如き、日ならずして津々浦々まで擴がりしが、又日ならずして跡を絶ちぬ。

人氣を集むるは不可、全く人氣なきも不可、人氣は加減のものなり。

磊々落々と小心翼翼と、之を兼ねんとせば兼ねるに難からず。

謂ゆる大膽にして小心なりとは即ち是なり、文明國の紳士として恥づる所なしといふも、亦た是れなり、若し夫れ己れの本能を縦にして到らざるなきもの、又は繩墨に拘りて意志の自由を失ふもの、如き、共に稱すに足らず。

人氣の販する所、利あり、各あり、大は以て一世を風靡するに足る。

—(世の中)—

一世を風靡するは或意味に於て一世に號令するのである。而



して一たび人氣を收むれば、爾後に事を處するの頗る困難なる  
ことがある。電燈の白熱を放てる後、燭光の極めて薄く、有れ  
ども無きが如くなると同じく、既に人氣を收めて尙ほ之を維持  
するには、前に成し、よりも幾層か大なる事を成さざるべから  
ず、然らずんば人々をして失望せしむべき恐れあり、之をして  
失望せしめざらんとして、強て事を試み、愈々出て、愈々拙、  
動もすれば人氣の絶頂より墜落し、有らゆる詭毀譏謗を被るに  
至るものである。

福の去來には、一定の道筋あり。

—(實業の世界)—

福の神は何時來るか、何時去るか知れぬ。來て人を試み、そ  
の何うするかを見る。福を與へるに適當として與へ、與へるに  
不適當と見れば、與へた所を奪つて了う。思ひも寄らぬ所に來  
り、大丈夫と見える所を去り、随分氣紛れであるやうだが、氣  
紛れのやうな氣紛れでない。略々道筋が立つて居る。

歐洲大戰亂が初まつてから、日本は不景氣になつたり、好景  
氣になつたり、いろく〜と變り、昨年は甚だ調子が好く、幾多  
の成金が出来た。成金で無い者も株が騰るに伴ひ、身代が倍に



なり三倍になり、或は四五倍になり、誠に福々者であつたが、暮れ頃に媾和説が出ると共に、株が急に下落し、成金で痛手を負つた者が少くない。

急に媾和に成りさうも無いので、多少落着き、相應に好い景氣で年を越したが、媾和の噂一つで彼の如くなつては、此の先さきも心配ものである。

死ぬと云ふことに重きを置くのは、まだ閑散な時代のことである。

—(新佛敎)—

閑な時は死ぬやうなことを思つて居る、畢竟後生願などをするのは、即ち閑な老人のことであつて、働きの最中の時にはさう云ふことは思はぬ。働きの鈍つて来る次からそろそろ死際の用心をする。そこへ坊さんがいろ／＼のこゝろを持出すのであるが、其の死ぬと云ふことは、左様に重く見るべきものであるか又之は宗教でなければ安心を興へることが出来ぬものであるかと云ふに、何もそれ程むづかしいものでもないと思ふ。宗教心がなくとも、平氣で死ぬものはいくらでもある。彼の山中源左衛門と云ふ俠客が死刑に處せられる時、



「わんざくれ、ふんばるべーか、けふばかり、あすはからすが  
 かつかぢるべい」と云つた、今日死んで明日は鳥が囓る、それ  
 だけのことである。

時代を超出するは、其の自ら心を用ゐるの大なる所、苟も  
 事を爲すに當りては、唯宜しく其の時代の爲にせんことを  
 念とすべし。

—(想 痕)—

前の時代には、前の時代に生れし者相ひ共に事を爲し、後の  
 時代には後の時代に生るゝ者相ひ共に事を爲すべし。故に己れ

は唯己れの生れし時代の爲に事を爲せば可。又た必ず己れの時  
 代の爲に事を爲さるべからず。而して己れの時代の爲に事を  
 爲すや、或る事を経始し子孫をして之を繼續せしむるの稱すべ  
 きも、己れの生れし時代を顧みず、友を千歳の後に求むと稱し  
 何事をか爲すあらんとするが如きは誤れり、若し友を欲するな  
 らば、之を其の時代に於てすべく、其の時代に友なくば、友な  
 きも妨げなし。何ぞ千歳の後に待つを要せんや。

金を死なして使ふあり、生して使ふあり。生かして使ふは  
 識者に富む者にあらずんば能はず。



カルネギー氏は、兎角の評あれど、何程か識力に富めり。他の滔々たる者の糞桶の輪を金銀にするが如くなるは、豎子獨り名を成す所以なり。エヅベレー卿は銀行家にして學識あり。品格に於てカルネギーの上であり、學界に貢献せること少からず實業に従事しつゝ優に他の業務に與かり得べき例として、己れの父が銀行家にして數學者、學士院の副院長なるを言ひ、尙グロートの銀行家にして歴史家、ロガス及びブレードの銀行家にして詩人、ブレスウキツチの商人にしてオクスフォルドの地

—(想 痕)—

質學教授なることを言へり。されど此等の人は、所有の金を以て、嗜好の學術に益せるの幾何なりしか、學術に於ける利益は金なき徒の成し遂げし所に優らざるに非ずや。

儉と吝とは以て似ざる主なるものゝ一、吝は儉に似て非なるも甚だし、而も似て非なるの眞を奮はんとする。寧ろ驚くに堪へたり。

—想 痕—

儉を勸むれば、相ひ率ゐて吝に陥らんとするが、若し世を擧て吝なれば、如何に富の積むも、國家に見るべきの利益なし



儉を勸むるには、先づ吝と差別するに務めざるべからず。凡そ  
 儉は無益に費さるるを意味し、無益に貯ふるを意味せず。勤強  
 して金を得、餘る所あるも、費さずして差支なくば之を費すこ  
 と勿れ。而も唯だ之を貯へて用ゐざるは鑛山より採掘し造兵局  
 にて鑄造せし所を、更に鑛山に埋没すると同じく、幾許か國家  
 の力を無益に費すものとす。之を人に貸し若しくは銀行に預く  
 れば、世に融通せらるゝ益あるも、苟も出して安樂に食らざら  
 んか、斯く人に融通せしむるよりも、自ら融通して、己れの従  
 事しつゝある事業を大にし、又は新たに事業を起すの當然なら

ん。儉を事とするは事業の爲め、即ち無益の費用を省きて、未  
 だ世に起らざらん所を起さんが爲めなり。一妓の爲めに數萬圓  
 を投じ、新事業の起すべきあるも恬として顧みざるは、儉を壞  
 るの好例ならずして何ぞ。普通に豪奢を示すといふは、概ね吝  
 の別名なるのみ。唯だ己れの虚榮の爲め、財を費すを厭はず而  
 して有用の事業を起すに熱心ならず、之を起すよりも、預けて  
 利殖せんことを欲す。其の努力を避けんとするは、折角健康な  
 る身體を受けながら、勿體なき次第ならずや。

成金は社會の固定を破るものなり。



—(實業の世界)—

戦亂が變態で、平和が常態であるのに、常態な平和に復しやうとして身代がぐらつくなど、當り前の身代と云へぬ。噂だけで大きな事にならなかつたが、眞に平和となれば、何の結果を見るであらうか、媾和の噂は之が爲めに好い戒しめになつて居る、成金に一の警戒を與へたのである。

成金其物は咎む可き迄も無く、次から次と出るのが望ましい富豪が祖先代々と極つては社會が固定し、動きが付かなくなる事ある毎に成金が出来て固定を破つて呉れる。岩崎は一代成金

であつて、三井、鴻池等の外に頭を出だし、其他、古河や安田や藤田や皆成金である。之より新らしい成金を成金と稱するだけで、成金は珍らしくも何とも無い。多くの小さな成金が出れば、其間に大きな成金が出可き順序である。

時代の眞に進歩する時、成るべく時代に後れざらんと勉むるは其の時代の進歩を助くるの効あり。

—(字 宙)—

時代後れと呼はるゝを畏るゝこと虎よりも甚だしきものあり  
己れ自らは時代後れと呼ばれざるを無上の名譽と爲し、人に對



し時代後れと呼ぶを以て最も痛切なる攻撃とし、口癖の如く時代後れと云ふ、是れ或る點に於て稱すべし。時代の眞に進歩する時、なるべく時代に後くれざらんと勉むるは、其の時代の進歩を助くるの効あり。時代後くれといふを一の制裁とするは即ち多數を驅りて進歩に赴かしむるの一方途にして、場合により頻りに時代後くれの語の下に人を促かして勤勉せしむるを可とすれど、單に時代後くれを口にするに止まるは、何等言ふを價せず。

大戦乱の風向き次第の成金は自己の力よりも運の力による

—(實業の世界)—

成金は全く自分の力が無いでは無く、幾らか勇氣もあり、機敏もあつての事であるが、運が來なくては、致し方が無い。船成金なんか、一昨々年夢にも思はなかつた事であらう。眼が覺めて見ると成金になつて居るといふ状態である。大戦亂を惹き起しやうもなく、大戦亂が無ければ成金になれなかつた。それを全く自分の力であるかに考へ、有頂天になつては福の神が愛想を盡かして去つて了う。媾和の噂で相場の狂つたのは、少しばかり之を戒しめたのである。今に於て察せねば、何う云ふ事



になるか解らぬ。

人はトン／＼拍子で有頂天になつて居る時、殆んど精神に異状を呈して居るとも言へる。天下第一呑みで、藝妓を總揚げし御前々々と云はせて大風に構へる所、考へて見ると随分可笑しい。大戦亂が持つて來た金は、大戦亂の風向き次第で如何になるか測り難い。

言ふが如く行はゞ大過なかるべきなり。

—(想 痕)—

言行一致とは稍々曖昧なる語なれど、多少の意義を有するこ

と勿論にして、其の謂ふ所の善言善行を指すも、亦疑ひを容れず。

言の非にして行の是なるは、言行共に非なるに優れど、普通に言といへば概して善言のことにして、行の此と伴はざるなり言行不一致として之を咎む。固より悪言悪行の一致を稱するに非らず、されど善言善行の困難なるに止まらず、或る部類の人は言行一致を務めず、又た之を思はず、口に言ふ所と身に行ふ所と別なりとし、殆んど一種の落語家を以て居るものゝ如し。此等は何の稱すべきを覺えず、言行一致の充分なるの望み難き



にせよ、成るべく之を期するが當然なり。

言行一致といふことは、必ずしも深く意義を究めずして可。

言ふ所は比較的善ければ、其の通り行ひて差支なしと心得べし  
戲言は別として、苟も言へば、之を行ふに務むべし。既に務む  
ればたとへ一致を得ずとも、其の志や則ち稱すべし。

金あれば事を成し得べし。又た事を成し得べからず。金な  
ければ事を成し得べからず。又事を成し得べし。

—(想 痕)—

金なくして、志を達せざるの稀れなれど、金なくして何事

もなし得ざるは、之れ有るも何事も成し得ざらん。黄金は有れ  
ば固より可、無きも亦た可、要は頭腦にあり。

金錢を視ること土芥の如くなるは、世の貧慾を戒むるの刺  
撃劑と爲るも、總ての人に之を望むべからず。

—(想 痕)—

既に社會の必要に應じて金錢の行はる以上、之を土芥視す  
るは、社會を解せざるの嫌あり。左に曲れるを直すには、先  
づ之を右に曲ぐべきにせよ、左に曲れるを見えざれば、特に之  
を右に曲ぐるを要せず。社會にして略々普通の状態ならんか、



金錢の必要を認め置くの穩當ならん。唯だ其の必要を認め、之に對し如何にすべきかは、各人各色、容易に一致せず、大約別ちて三種とす。

- 一に金を用ゐる者、
- 二に金を愛する者、
- 三に金を拜する者、

運の成功者は殿様藝なり。

—(實業之世界)—

歐洲大戰亂熾和の噂で失敗し、裸になつた者があれば、それ

は幸である。運は斯かるものと考へ、成る可く運を頼まず、己れの方で福を得るやうにすべきである。自分の腕で作つた福が最も安全である。福の神は自ら助ける者を助ける。成金で失敗して、更に回復して成金となつたのが、成金として成功するのである。幾度も失敗し、失敗毎に教訓を得、克く回復するのは愈々可い。

世に殿様藝といふのがある。碁が二段三段となつて居つて、愈々となれば初段に二目の者に負け、或は四目の者に負ける。平生初段の者を負かして偉さうに構へて居るのは、實に笑はれ



て居るのである。言はゞ馬鹿にされて居るのである。初段以下の者に散々に負かされて、此處で氣がついて奮發すれば、眞に二三段になり、或はそれ以上になれやう。負けた事が無ければ眞に勝つ事が出来ぬ。運が來て成功續きなのは、何處か殿様藝に似て居る。

獨立と云ふは善し、然れども獨行と云ふは必ずしも善からず。

—(想 眞)—

獨立と云ふは善し、人生れて一個の完全なる有機體を成す、

漸く長じて總べての能力を備へ、以て己れの爲さんと欲する所を爲すを得、行かんとして乃ち行き、止まらんとして乃ち止まるべし。幸に五體を具備し、而して人に依らずんば世に立つこと能はざるは誠に卑むべき徒とす。然れども獨行といふは必ずしも善からず、身體は個體として離別するも、元と兩親より生れて家族の一人となり、社會の一人となりし者、協同的關係は濫りに廢絶すべきに非ず、他の人々と相ひ共にすること事の當然と謂ふべけれ。獨行するは萬已むを得ざる場合のことにして決して人事の自然に出でず。故に人は各々獨立を念とせざるべ



からざると同時に、他と與に俱にせんことを忘るべからず。獨立獨行と言はずして、獨立共行と云ふべし。

人は何かに驚かされると、注意して其ものを観る氣になり注意して觀れば更に進んで、それに就て攻へる氣になるものだ。これが觀察と推理との生ずる所以である。

(字 宙)

人智の幼稚なうちは、驚くにも足らぬ事に驚いたり、驚くべき事に却て驚かなんだりするので、その觀察やら推理やらも頗る杜撰なものである。然し、それこれするうちには、觀察を主

として實驗に重きを置く人と、推理を主として實驗を笑ふ人の別を生ずるに至り、互に相争ふやうになるが、百聞一見に如かず論より證據といふ事で、追々實驗を重んずる方が勢力を得るやうになつたのである。

人固より一日の事あり、半日のこともあり、一時間のことさへあり、食事は一時間に足らざるも、決して缺くを得ず。

(想 痕)

一日の事も必要、一月のことも必要、一年の事も必要なれども、是れのみなれば立ん坊と大差なし。立ん坊の卑むべくんば



たとへ絶對的に此と違ふの不可能事なるも、成るべく此に違ふを以て向上とせざるべからず、然るに官吏たるをば蓄財の爲とし、議員たるをば收賄の爲とし、他に多く言ふべき無ければ、其の職に在るは頗る奇異ならずや、金を欲せば、官廳に仕へ、議場に出づるよりも、商業に専らなるに若かず、將た目的は目的とし、何の成す所ありたるかを問ふに折角着手せしも轉任を命せられ、次いで新たに着手せしも復轉任を命せられ、特に纏りたる事業なし、斯くては一日だとして何の異なるべき。

人間が藥品中で最も欲する處のものは、壽命を延ばす藥品

及劣等鑛物を黄金化せしめる藥品とである。

——(宇 宙)——

漢の武帝が蓬萊に安期生といふ名の仙人を尋ねて不死の薬を求めると共に、朱い丹砂を化して黄金にさせようとした。又秦の始皇帝が占師の徐福に命じて不死の薬を求められた。

又羅馬帝カリギユラは三硫化砒素の天然産である雄黄から黄金を製する試験場を設けたことがあり、又不死の薬を製する法も古くから盛んに傳へられたもので、英國のローガー・ペーコンは、泳氣鐘や唧筒を案出したほどの碩學であつたが、猶ほ劣



等の鑛物を黄金に化し得ることを信じ、且つ、硝酸と鹽酸とを混合した王水に黄金を溶解したものが不死の薬であると、之を他人にも披露し、自らも屢々飲んだのである。

斯く劣等の鑛物を化して黄金とする工夫や、不死の靈藥製造に従事することをアルケミー (Alchimia) と稱せられた――

友の善惡は、己れ自らに因りて定まること多し。

——(想 疾)——

友の善惡は、己れ自らに因りて定まること多し。官吏は商人と交りて貨殖の途を知り、動もすれば暴富を計らんとするも、

其の故を以て、商人を惡とすべからず。商人は茶の湯義太夫の師匠と交り、職業を怠ることあるも、其の故を以て師匠連を惡とすべからず、中には眞に使佞邪僻、其の誘ふに任かせば、何邊に及ぶの測り知られざるあれど、是れとて此に應ずるの縁あるが爲めにして、縁なくんば何事も起らざらん。孔子佛肝の招きに應せんとす。子路曰ふ、君子は不善を爲す者と共にせずと孔子答ふらく、然り、而も堅きを曰はずや、磨すれども磷せず白きを曰はずや、涅すれども緇せずと。匏瓜の例を引きし所、稍々疑ふべきを覺ゆるも、不善を爲す者と共にし、自ら其の不



善に染まらざるを確信する、豈に君子たる所ならずや。悪友交るを恐るゝは、自ら悪友に感化せらるゝを慮るもの、本来悪友と相ひ距る僅に一二歩、辛うじて悪人たらざるのみ。さる薄弱なる性格を以て正道に處し、何程の事を爲すに堪へんや。酒匂氏の悪友に誘はれたる、誘はるべき素因なしとせず。氏自ら總てを己れの不明なるに歸し、不明なるを己れの凡人なるに歸し、凡人の果敢なきを悲みたるが、凡人も解釋の一ならざれど凡俗の謂ゆる凡人を以て居るは、謙讓に似て而も非なる者なり人生まれて凡人なるも、必ず向上心あるを要す。才の足らざる

も、力の足らざるも、人たるに於て敢て劣位に居らざらんことを期せざるべからず。凡人にして凡情を免れずとて、悪友の誘ふに従はんとする、是れ自ら棄つるもの、既に自ら棄つる、則ち何の到らざる所ぞ。自ら凡人たるを云々せしは、眞意に出でざらんも、其間悪友に誘はるべき隙を見出だし得ずとせず悪友の害を考ふるに先ち、自ら省みて戒むるの必要ありしなり。

心を披いて相信する能はずして漫りに和合を希ふの徒、寔に愚なり。



個々の人、各々皆力を有して居る。所謂社會の力、かの個々の力を集めて成せる所である。其の最も權勢のあるものは、其の最も多量の力を用へる者である。力の集中する所、一にして止まるを得ない。各々自ら中心として、傍近の力を聚團する者。到る處之れ有り、皆多少の蓄養があつて、重きを世に爲さざるはない。資て我に合すれば、我の力長じて、而して事功を成すこと大を加ふる。其の相牴牾し、相衝擊して、兩つながら相消滅するが様なのは、力を用ゆるの下なる者、若し情勢の或は不

—(斷雲流水)—

可なるものあり。他の力の決して我と合すべからざるあれば、之を碎いて而して我が力の行く所を開かなくてはいけない。夫れ他の力を利用するは、將さに以て自ら大にせんとするものである。即ち他を引て自ら合せんとする、宜しく他を視ること己れを視るが如くせなくてはならない。既に引て而して自から合す、宜しく相阻隔して互に疑惑を挾むべからず、宜しく一身同體、偕に利を同じふし、偕に害を共にせざるべからず。人に任じて信ずるの至れる者を謂て、赤心を人の腹中に置くと云ふが如是ならんは、以て一心にして同體たることが出来ないの



である。竟に和すべからずして、必ず並存兩立することが出来ない。必ず他を碎折せざるべからずば、厚く自ら力を蓄積し、其の引て自ら助くべきを引き、撃つことあれば必ず之に克つことを期せなくてはいけない。克つことを期せば、又斷々乎として克たざるべからず。

空々寂々日を送るのは山海の珍味に飽いても砂上に樓閣を築いたやうなものである。

—(世の中)—

イエス及びノーは口外のみ用語にあらず。口内にも言ふ

べし。

—(日本及日本人)—

朋友と云ふ事、之を廣義に解する即ち無數無限、人といふ人殆んど皆自然らざるは莫し。街頭を歩する、行人織るが如く、車馬憧々として絶えず、皆互に害すること無く、往くもの、來るもの、路を譲りて友爾たり。

演戲を觀、角觥を觀る。場に在る者幾百千、均しく熙々として娛み、歡呼して應和す。その他豪家温戸よりして以て負郭窮巷に至り、若しくは山石を經、水崖を渡る。國中何れの地にあ